

比較心理学

個性の研究

ヴィルヘルム・ディルタイ
三 木 博 (訳)

【訳者解題】

ここに訳出したのは、ディルタイ (Dilthey, Wilhelm 1833-1911) の『全集』第5巻所収の論文『比較心理学 個性の研究』(Über vergleichende Psychologie. Beiträge zum Studium der Individualität. 1895/96) の第 〃 章部分 (V. 241-273) ならびに第 章 (V. 303-316) である。この論文は『記述的分析的心理学についての構想』(Ideen über eine beschreibende und zergliedernde Psychologie. 1894) の続編をなす中期ディルタイを代表する心理学論文である。『全集』所収の論文の章立ては、以下のとおりである。

- ・ 自然科学と精神科学
- ・ [方法] 人間本性の同種性と個性化
- ・ 人間の個性化に関する普遍的視点
- ・ 人間の歴史的世界における個性化の最初の描写としての芸術¹⁾
- ・ 個性化問題の方法的取り扱いにいたる比較精神科学の歩み

『全集』第5巻の編者の注釈 (V. 422-426) によると、この論文はもともとディルタイが1895年4月のプロイセン科学学士院における講演をもとに、『比較心理学』の表題のもとに完成しておいた論文 1895年論文 を復元したものである。ディルタイはこの論文をさらに補完し、一冊の書物(『比較心理学 歴史・文学・精神

科学研究のための諸論』)としてまとめる意向であった(95年10月13日付け、ヨルク伯宛書簡)。しかしその校定中、諸般の事情により公表を撤回し、翌96年には短縮されたかたちでその中間部分のみが『個性の研究』の表題のもと、『プロイセン科学学士院会報』(1896年3月)に公表された。

『比較心理学について』は、もともと新カント派のヴィンデルバント (Windelband, Wilhelm 1848-1915) によるディルタイ批判を含む1894年の講演『歴史と自然科学』(Geschichte und Naturwissenschaft) に対するディルタイからの反批判ともなっている。ヴィンデルバントはその講演のなかで、ディルタイが精神科学と自然科学とを区別する仕方に対する疑念を表明し、その心理学が「歴史科学に対してなら本質的な連関をもっておらず、それどころか自然科学と見なされるべきである²⁾」と述べた。すなわち精神科学の基礎づけとしてのディルタイの心理学は否定され、人間の歴史的世界を理解するには心的経験では不十分である、とされたのである。ここに訳出した第 章と第 章の前半部 (V. 242-266) が、ヴィンデルバントとの対決をはらむ箇所である。

さてこの論文の校定中に、あらたにエビングハウス (Ebbinghaus, Hermann 1850-1909) による自然主義的心理学の立場からのディルタイの記述的分析的心理学に対する批判が現れる。すなわちディルタイは心理学の最近の進展について

1) 芸術作品がもたらす人間の個性化理解への貢献をアツかった第 章 (抄訳) は、以下に別に訳出しておいた。

[1996 東北大学教育学部研究年報第44集: 43頁 64頁]

2) ルードルフ・A・マックリール1993「ディルタイ 精神科学の哲学者」大野篤一郎他訳(叢書・ウニベルシタス414) 法政大学出版局: 238頁以下参照

無知であり、自然科学としての心理学は彼の記述的分析的心理学の理想をすでに実現してしまっている、と³⁾。

こうして実験主義者たちとの対立がさらに激化するなかで、ディルタイはヴィンデルバント批判のこの箇所を、新カント派との論争をひとまず回避するかたちで『個性の研究』では削除している(V. 423)。また比較方法の諸科学、特に古生物学での適応の歴史を通覧し、比較精神科学の可能性を模索した第 4 章(中断)も『個性の研究』では削除されたが、その本質的部分は後年の『精神科学における歴史的世界の構成』に受け継がれている。

今回ここに訳出した部分からは、新カント派(あるいは実験主義者たち)との複雑な経緯をたどる論争のさなか、ディルタイがみずからの構想を擁護しようと試みた執拗な努力が読みとれる。とりわけ 精神科学と自然科学 の区別の立てかたに関連して、内的経験にも外的経験にも還元されず、その両者の経験を結びつける経験の第三の形式として、反省的(超越論的)経験(V. 247)が着目されている。それはまた初期の心理学と後期の歴史理論を媒介する概念としても、興味深い⁴⁾。

なお訳出にさいして依拠した全集は、Wilhelm Dilthey : Gesammelte Schriften, V. Band, Göttingen (Vandenhoeck) 1957 である。

.....

記述的分析的心理学は、ちょうど樹の幹が枝へと伸び広がっていくように、比較心理学へと伸び広がっている。記述し分析する方法は、比較する方法に連なっている。ところで最近の論文では、私は一般心理学にかぎって論じてみたのだが、この一般心理学は心的生の同型性をその主題にしており、これにたいして比較心理学は、まさに個人間の差異・そのニュアンス・類似を学問的に取り扱おうとする。一般心理学は

そのような個人間の差異を背景に押しやってしまう。一般心理学がもっぱら記述し、分析しようとしているのは、あらゆる個人において同種的な心的構成要素、またあらゆる個人に同型的な心的生のプロセスである。一般心理学は、普通の人間ならだれにも認められるような連関を把握しようとする。人間の全体ということが一般心理学の対象であり、この心理学は人間のなかの同種的なものや同型的なものを、個人間の差異、そのニュアンスならびにそうして規定された類似性を捨象することによって把握しようとするのである。しかしこれら〔差異・ニュアンス・類似性〕こそが、比較心理学の主題なのである。さてこのことによって比較心理学は、きわめて重要な問題を獲得する。この心理学も人間を対象としている。しかしこの人間というあらゆる個人を貫いている構成要素の同種性やプロセスの同型性に基づいて、この人間のなかに今や個性・個性間の差異のニュアンス・類似性・類型が現れてくる。つまりこれらのことが比較心理学の対象なのである。まさに限りなく充実しつつ独自に形態化しながら、人間は息づいている。それでは、個人的に差異化された特徴がまさに心的生の基本形態と規則的に結びつくことによって、はたしてどんな問題が生じてくることだろう！そうした基本形態とは男性と女性・種族・国民性・風土の特殊性・生まれつきの気性の相違・その相違のなかで目につく四気質の類型、さらにはたとえば詩人を宗教者から、学者を実践的な生から、ペリクレス時代のギリシア人をルネサンスのイタリア人から分かつような、しなやかに充実し洗練された差異なのである。さて比較心理学はそうした典型的な基本形態において、特定の特徴どうしが規則的に結びついているさまを記述しようとする。さらにその根拠を探究しようとし、こうした普遍的な心的生の特殊化のなかで働いているプロセスを認識しようとする。そして心理学はこの課題を扱うことによって、比較精神科学の系列に

3) 同書、240頁参照

4) 同書、252頁参照

属するのである。

第 章 自然科学と精神科学

私は 自然科学と精神科学 の区別から出発してみたい。ヴィンデルバントはこの区別にたいして最近疑念を表明し、これとは別のきわめて優れた学問区分によって置きかえようとした。私は彼の才気に満ちた論述にたいして、その抗論を展開することで、比較心理学に基づいている普遍的な関係をもっとも良く説明することができよう。ヴィンデルバントが述べているように、もし自然科学が外的知覚に基づき、精神科学が内的知覚に基づくのであれば、その場合特別な認識様式としての内的知覚にたいする疑念をまずはじめに解消しておかなくてはならないであろう。このこともまた成功するのであれば、精神科学の事実がまったくもってまっぴら内的知覚に基づいているのではない、という事実が判明しよう。「しかしとりわけ、実質上の区分原則と形式上の区分原則との不一致は、自然科学と精神科学 のあいだに心理学のような重要な経験分野は帰属しえない、ということに示されている。すなわちその主題によれば、心理学はただ精神科学として、そしてある意味ではその他のすべての学問の基礎として性格づけられる。しかしその方法全体、方法上の態度は終始、自然科学と同一である。」

1

私は次のような概念規定からはじめよう。私は外的知覚あるいは感覚的知覚を次のような出来事として、つまりそこで感官に現れてくる印象が、自己とは区別される全体と結びつけられるような出来事として理解する。どのように外部にたいしてこうした関係が成りたつかについては、外的世界にたいするわれわれの確信の根拠についての以前の論文で論じておいた。すでにそれ自体で響きはじめるひとつの音も、単なるひとつの印象または印象の連続から、外的な知覚へ注意をとおして移りゆく。そして注意は音を静寂から際だたせ、印象の連続を持続意

識に統合し、〔意識〕強度の増減に気づき、音を局在化する等々し、こうして一種の全体を形づくるのである。これらすべては関心と注意を前提としており、強度を増した意識の興奮が生じるが、この意識の興奮は今やそれとは切り離せなくなった連想・判別・結合などの働きのなかに現れる。それから外的な経験ということをして私は、出来事の総体として理解する。そしてここでは論証的な思考によって、ひとつあるいはいくつもの外的な知覚が次の連関、つまりこれらの知覚がそれによってより良く理解され、外的世界の認識が拡大されるような連関にもたらされるのである。

これら外的な知覚のすべて、そしてこれらの知覚に結びつく外的な経験から、出来事もしくは状態の気づきが区別される。しかもとりわけ、こうした出来事や状態を外部へ置きかえることができないという否定的な特徴によって区別されるのである。こうして外的なものから区別される内的な出来事もしくは内的な状態という概念が成りたつ。そのような内的事実とは、感情のさまざまな状態ならびに思考や意欲の行為である。この際そうした事実がまったく瞬時的な知覚に現れようが、部分的に想起されようが、もしくはたとえば思考行為や意志行為のように、まったくただ想起された残像を把握することによって理解されようが同じことである。それはわれわれが徐々に強度を強めながら、感覚的知覚において統合するような、ひとつの音の連続する要素の場合とまったく同じである。その知覚の性格にとって、そのとき想起された強度が知覚された強度に結びつけられるといったことは、まったくどうでもよい。さてわれわれがこれらの内的な出来事や状態を注意しているかぎり、内的な知覚は生じる。内的知覚ではまさに注意することによって、関係はより明瞭に意識される。そしてそれらの関係のなかで内的な出来事や状態の構成要素は、互いに関係しあう。このとき一方では、そうした内的事実と自我あるいは自己の意識との結びつきは、徐々に注意力を増しながらより強く強調され、より

明瞭に気づかれる。また他方では、この内的な知覚はすでに同在化をより鮮明にすることによって、外的知覚とより明瞭に関係する。なぜならこの外的な知覚はたしかに内的な知覚にたいしても、つねに現在の基盤を形成しており、たとえ注意が内的な状態や出来事へむけられていても、対象のイメージとの関係が意識に残り続けるからである。たとえばアルペン地方での太陽の輝き、牧草地の香り、小川のせせらぎ、柔らかな緑、そして調和した雪と氷河とのコントラストが誘う晴れやかな感情は、とりあえず気持ちを活気づけるものであり、広がっていくように私に意識され、さらに内的知覚にもたすことができるのである。今や自己がよりはっきりと高揚し、感覚的な知覚との結びつきがより明瞭に意識される。つねに自己は状況に取りまかれて存在するのである。

さて知覚の概念に、知覚が生じてくるプロセスの明白な意識が含まれておらず、それゆえ知覚が非反省的なものであるということが属するならば、このことから感覚的にあたえられた対象についての内的知覚は存在しない、ということになる。なぜならそうした感覚知覚を外的対象に関係づける強制はただ論証的な思考によってのみ、そして論証的な思考にとってのみ課せられるからである。しかもこのことは感覚の全体をその構成要素に分解すること、またこの構成要素をそこで構成要素が形成される有機体と関係づけること、そして感覚の構成要素の主観的性状についての反省、ならびに対象知覚の形成との内的出来事の関わりによって生じるのである。したがって内的状態もしくは内的出来事として意識に立ち現れてくるものを理解することは、この意識の連関によって感覚対象にもおよび、内的知覚はここで上述の論証的な思考過程によって置きかえられねばならない。そしてここで外的経験との奇妙な類似が、意識連関が把握する領域に立ち現れてくるのである。

普通は外的経験には内的経験が対立している。そしてわれわれは内的経験をふつうただ、

出来事の総体として理解している。この出来事の総体のなかで、論証的な思考によってひとつあるいはいくつかの内的な知覚が次の連関、つまり精神的事実がそれによってより良く理解せられ、内的世界についてのわれわれの認識が拡大されるような連関にもたらされるのである。内的経験という概念が、まさに外的経験もしくは感覚的经验という概念に対応しているさまが見てとられよう。はたして外にむけては置きかえられないような状態や出来事、たとえば感情・情念・情熱・思考プロセス・意志の行為だけが内的知覚に生じる。こうして内的経験の概念からして、内的経験がまずそうした種類の出来事と状態に、まったく限定されるということになるのである。つまりこうした部類の精神的実実は、われわれの実践的生と親密な関係にあって、とりあえずは実践的生との関係が内的経験の概念にあるのである。宗教者がその内面的な経験について語るとき、その経験を神との交わりについての熟慮として、また方便・我意・利己的な情念を克服しようとする彼の敬虔な意志に抗する情熱の戦いとして理解している。これと似た意味で、前世紀の感傷的で道徳的な流派が内的経験について好んで語っていた。心情の経験はそのとき、しばしば内的経験と同じことを語るのである。

しかしこの内的経験という概念は、自己みずからをより詳しく知るのに使われるとき、むしろ観念的な表現形式をそなえている。そうして内的経験は叙情詩に表現されるのである。叙情詩はたとえばゲーテのようなきわめて完成された形式では、つねにある状況での詩人みずからの生を、つまり対象の表象に表出している事態に包まれた詩人の生を表現しているのである。内的経験はあらゆる文芸全般の基礎となっている。内的経験は神学と道徳の基礎なのである。それによって一般心理学は可能となる。そしてここでわれわれにきわめて密接に関わってくるのは、内的経験によって個人に固有な心的連関も把握できるということである。そうした内的経験はストア派的な自己省察において、とりわ

けマルクス・アウレリウスの不滅の作品のなかで固有の形式を生みだす。この形式はさらにアウグスティヌスを貫いて、中世文学の全体のなかで、きわめて意義深く持続している。ペトルカではこの形式は世俗化され、そしてシュライアマッハーの『独白録』ではきわめて適切に適用された。だが明らかにここでは、フィヒテにおけるように自己の省察が上述の限界を踏みこえている。この形式はゲーテの『ファウスト』のもっとも壮大な箇所では圧倒的である。いたるところでこの形式は外的経験と共働しており、この外的経験がまた内的世界を他者の身体に置きかえることを可能にしているのである。状況のもとでの個性、他の個性から際だった個性は、こうして把握されるのである。

しかしこれらの内的経験はすべて、決して意識現象の全連関を包括しているものではない。内的経験は対象の表象の手前に立ちどまったままであり、対象の表象をいまだ自己みずからの意識連関に組みこんではいない。こうした精神的事実の地平の拡大は、反省によって引きおこされるのであって、この反省が内的経験の類似物を形成するのである。

内的経験による方法が、その本来の対象を越えてこうして広がっていくことが、まさにこの内的経験の活力と評価の高まりに由来していることは、歴史的にきわめて奇妙なことである。このことはまず最初に古代の懐疑派におこり、さらに徹底したかたちでアウグスティヌスに生じた。それから17世紀と18世紀のあいだの内的経験へのさらなる沈潜と関連しながら、さらに普遍的・根底的なものになっていく。これはまさに、対象の表象をその構成要素に分解すること、構成要素の一部すなわち感覚要素と、そこに感覚要素が現れる器官との関係、このことに基づいた、これら感覚要素の主観性についての反省、ならびに他の部類の構成要素の研究、つまり対象の表象が形成されるときに協働している精神的出来事の研究によって生じるのである。カントがはじめてこの論証的な思考過程

に、つまり外的知覚にあたえられた対象イメージをわれわれの意識事実の連関に組み入れる過程にある特別な名称をあたえた。カントはこの種の研究を超越論的と呼んだのである。私はこの表現をとりあえずここでは認めておきたい。その表現がたしかにこうした連関ではより広範な意義をもつとしても。というのは今日当然ながら、この超越論的反省が対象の表象についての心理学と精神物理学に係しているからである。

この超越論的反省がある特定の対象の表象に分析的に取り組み、対象の表象を心的連関との関係によって理解できるものとし、精神的世界についてのわれわれの知を豊かにするものであるかぎり、ここでも経験が成立せねばならない。それは外的知覚あるいは感覚的知覚の領域でまず外的経験が成立し、また内的知覚の領域で内的経験が形成されたのとちょうど同じである。こうして生じる経験は第三の部類の経験を形成する。この経験は内的経験の類似物であり、心的生の連関についてのわれわれの知を内的経験の地平をこえて拡大するのに役だつ。こうした部類の経験に近づくには、分析と理論的考察がより高度に必要とされるということは、たしかに多くの自然科学の経験とも共通している。さてここでひとつの疑問が生じてくる。すなわちこの超越論的反省と連関していつかは、感覚の構成要素を外的世界に係づける強制が感覚印象にとって消えうせるのではないかと、という疑問である。そのような意識現象としての感覚印象を、心的生全体との連関の側面で把握しようとする修練は、感覚印象と外的世界との関係を度外視する能力を疑いなく著しく高めることになる。感覚印象におけるこうした抽象化も、生の感情が感覚印象と結びつき、空間上の関係が退くにつれて緩和されてくる。聴覚印象での時間上の関係、たとえば〔聴覚〕強度の変化に連続して集中するという持続的な修練は、これらの印象が外在化するのを高度に度外視できるようにする。しかし私は何らかの感覚領域でのいかなる経験においても、外的世界との関係が完

全に消失するのを認めない。それで私は次のように想定する。つまりいかなる感覚的知覚も内的経験という性格を引きつけることはできない。それゆえ内的経験の概念をその通常の限界をこえて、それがこの第三の領域をも包括するか、あるいはこの領域にたいして何か他の表現が選ばれるまでに拡大することが適切かどうかは、疑わしく思われるのである。

それでもし、この方法をたとえば超越論的と呼ぶのであれば、たしかに他方でこの方法を同じように経験として、したがって超越論的经验と言いつくすのはなんら問題ではない。なるほどここでは経験の解釈と普遍的・法則的關係の探索とが、外的経験もしくは内的経験の場合よりも、互いに分かちがたい。自然科学の領域では経験に近づくのに、理論的考察と実験設備が必要とされるが、そこでもこの表現〔経験〕がしっかり保持せられているように、この超越論的方法の領域でもこの経験という表現は保持されるのである。とにかく今や第二の領域と同様に、この第三の領域にも精神的実事が見れる。そして精神的実事と内的経験の事実との關係が探究され、意識現象としての対象イメージの構成要素が心的連関に組みこまれてはじめて、心的連関の全体が把握されるのである。

2

さてこれらの規定を、どうすれば精神科学の概念がもっとも適切に定義され、どれくらいの範囲がこの概念にその目的にもっともかなってあたえられるかという問いへむけてみよう。さしあたって物理的事実と精神的実事という区別をこの際、根底におくことは何らさしつかえないものと思われる。精神科学は自然科学の基盤に基づいて、感覚対象に現れる精神的実事とその連関を相互に研究し、ならびに物理的事実との連関を研究する。自然科学と精神科学の違いが、対象の二種類の区別に基づいているのではないことは明らかである。自然の対象と精神の対象といった違いは存在しない。対象の概念は、感覚印象と、自己からは区別される

ものとの關係、およびこれらの印象と全体、したがって自己には依存せずに相たいしている全体との結びつきによって規定されている。なぜなら感覚印象からのみ、空間の連続性において閉じられ、持続する全体が生じたからである。感覚によってのみ、自己には依存しないものがわれわれにとって存在する。このように感覚印象だけが対象と結びつくことができる。そして対象の不可欠の相関者とは、みずからの自己なのである。

もしこれらの対象のなかに、みずからの自己あるいはそれに類似したものを対象に移しかえるいかなる契機も存在しないとすれば、自己には依存しない、自己にとっての諸々の対象、すなわち自然だけが存在することになる。圧倒的な量の自然の諸対象にも、そうした自己をさし示す特徴を見いだすことはできない。むしろ圧倒的な数の自然の対象が、そのような置きかえなしに連関にもたらされる。そしてこうした連関に、物体もまた組みこまれるのである。われわれはこれらの物体にそうした置きかえをとおして、精神的出来事を移しいれざるえない。このような連関をわれわれは自然と呼ぶのである。そして連関が生みだされ、われわれがそこに精神的な出来事を移しいれる特色ある種類の物体も連関に組みこまれるに応じて、自然科学の概念は自律的で、それ自体で完結した科学のシステムとして形成されるのである。自然科学は自然の因果連関を法則にしたがって、ひとつの独立したシステムへと完結させることができる。ただしそれは有機体の形成とその段階的發展に影響をおよぼす心理的要因にたいして、自然科学が脳と神経組織での生理上の代理機関を提示できるかぎりにおいてである。法則にしたがう生理的出来事全体の遺漏のない連関に自然科学が到達できるのは、明らかにただ次のようなまったく仮説的な想定、つまり心的出来事はすべてたんに随伴現象であって、その生理上の等価物は自然の経過に組みこまれる、という想定によってだけなのである。

自然全体はただわれわれの自己意識の相関者として成立し、したがって自己意識にとっては諸々の現象の連関にすぎないこと、このことは自然科学のシステムの自律性にとってはまったくどうでもよいことである。このような批判意識はデカルトとホブス以来はじめて、つけ加わったものである。今日ではこの批判意識は避けられないものであり、たしかに自然研究者はこの意識を度外視するか、あるいは彼の研究対象である自然もまた、諸々の現象のシステムとして解釈するか、という選択の前に立たされている。感覚印象はどちらの場合であっても、そのままである。感覚印象を外的対象に結びつける強制は、解消しえない。たとえこれらの対象を分析し、その構成要素を意識現象として自己の連関に組み入れる超越論的方法が感覚印象にさしむけられているとしても。

自然科学とは区別されて、精神科学は成立する。というのはわれわれは動物や人間の有機体に心的出来事を移しかえざるえないからである。われわれは内的知覚にあたえられているものから、動物や人間の有機体に、その生の表出に基づいて類似物を移しかえる。有機体に、心的出来事をそこから移しかえねばならない、といったような境界〔の存在〕は疑わしい。ただ恣意的な運動の見かけからだけ、心的生を推論できるのである。またこの心的生は動物の身体などに現れるように、不安定で、連関がなく、解釈するのがむづかしい。しかし人間の身体にだけ現れる内的出来事は、内的経験にあたえられたものとまったく同様である。たとえこの内的経験にあたえられた精神的事実が、同じく人間の身体の感覚イメージと結びついているとしても。したがってこれらの精神的事実は、真に最後の内奥まで理解できるのである。精神的事実はすべて互いに類似している。思考プロセスの普遍妥当性・感情の転移性・目的行為の論理的整合性は、社会的・歴史的世界でこれらの内的出来事が連関するのを可能にしている。これらの特徴が結びついているような内的出来事を、われわれは精神的出来事として記述する。この

精神的出来事ということから精神科学はその名称を担うのであり、これは精神的事実がもっと詳細な意味で、この科学のもっとも重要な内容を構成している、という点に基づいているのである。

ゆえに精神的事実の最初の特徴は、内的経験の事実が人間の身体に置きかえられることにより精神的事実がわれわれにとって存在する、ということである。このことによって、精神的出来事が外的事実として立ち現れてくる。またこの特徴は、あらゆる精神的事実はまず内的経験によって存在する、ということとしても理解される。さて内的経験にあたえられたものは外的対象に、一種の転位によって置きかえられる。その概念は後ほど説明するとして、この転位は二つめの特徴を前提としており、この特徴は精神的事実を境界づけるのに同じく必要なものである。なぜなら真の転位が生じ、したがって親和性、思考の普遍妥当性等、要するに思弁学派で理性の同一性と呼ばれたものが、ここで社会・歴史的世界を形成し、このことによってはじめて精神的出来事が動物の心的生の内的経過から区別されるからである。こうして精神的事実の最初の特徴に、二つめの特徴がつけ加わる。すなわちみずからの内的経験の事実と、われわれが他の人間の身体に移しかえざるえない事実との同種性、この同種性に基づいて、みずからの内的経験をその最深部まで他の人格にふたたび見いだす可能性、そして最後にこうして成立する精神的世界の連関。これらの契機はひとつの特徴と相互に密接に結びついている。それゆえこれら二つの特徴こそが、精神的事実を十分に境界づけ、その経験可能性を基礎づけ、したがって精神科学にとっての経験基盤の種類を明確にする。そして同時にこれらの経験を真の精神科学の連関にもたらす可能性を動機づけることになるのである。

こうして人間の有機組織の生理的連関に、精神的事実の連関が現れる。はたして精神科学において、この精神的事実の連関が認識されるよ

うになる。したがって内容こそがこれらの科学を境界づけ、分節するのである。この内容に応じて、精神科学の連関が事実上どのようなものか、ということが決まるのである。自然科学の外部に心理学・文献学・歴史・言語学・経済学・法学・倫理学・神学・美学・国家学等々が成立し、これらの諸学が精神的事実の関係のシステムがますます徹底的に、ますます精緻に形づくられるような連関を形成するのである。こうした諸学の存在とそれらの発展的な結びつきは、精神的事実の連関にとってある証明を含んでいる。そしてこれら精神科学のいたるところで、外的経験・内的経験・超越論的方法そして精神的生の同種性に基づく内的経験の対象への転位による共働が実証されている。いたるところで思考にとっての基盤として、精神的生全体の同種的な連関が示されており、この基盤に基づいて精神科学は成立するのである。

ところで生理的連関に基づいて、精神科学における精神的事実の個々のシステムが研究されるときには、精神的世界の偉大な内容はその特別な性質に応じて、いつも繰り返されてきた。精神的事実の特性は、その力強い内容に即して読みとられるものであり、それはこれまで述べてきた二つの抽象的な特徴よりもずっと以前に自然なかたちで思考に浮かんでいた。それらの特性は今日もなお、ずっと鮮やかに残っている。それらはとりわけ精神的世界と、この世界を認識するのに役立つ科学を、生理的世界と自然科学から分離し高めてきた。精神的な状態と出来事の全体は、まさに感情のうちに発生する価値によって、またそれぞれが論理的に首尾一貫して形成されている偉大な諸連関へと分岐されることによって、そして意志の卓越意識によって自然の全領域から区別され、そこから際だたされている。具体的で実証的な思考にとって、精神的事実のこれらの特性は、きわめてわかりやすい。それらの特性を完全かつ自然に秩序だてて説明しようとするれば、その導きの糸は人間の心的生の構造のなかにあるのである。こうして成立する連関から実際また、

精神科学はただ認識であるばかりでなく、個人の歴史的な生を導くこともその目的とする、ということが派生してくる。しかし精神的事実を記述するには、これらの特性の連関はきわめて有用なものであり、精神的事実を定義するには、たしかに二つの抽象的な特徴はとりあえず利用できる。というのはそれらは精神的事実を客観的事実から境界づけるのに十分なものだからである。

しかし精神科学の構成は次の場合にのみ、正しく把握される。つまりどのようにして精神科学では精神的事実が感覚対象に付与されるのか、したがってどのようにして物理的な状態と出来事に、精神的な状態と出来事がつけ加わるのか、その様式が明らかにされるときである。この二番目のシステムを構成している事実は、同一の感覚対象に含まれており、そこに外的自然の事実も属している。しかも精神的事実のシステムは、物理的事実のシステムをその制約ならびに基礎としている。というのは精神的事実の関係は身体に現れるのであり、その身体はとりあえず物理的特性のシステムによって規定されているからである。

しかし二番目のシステムの事実を把握するために、外的な知覚と経験に内的な知覚と経験がつけ加わり、それから超越論的な方法によっても補完される。こうして精神的事実はその知の由来によれば、物理的事実とはまったく異なったものとして、それゆえ物理的事実とは比較できず、ただ規則的に物理的事実と共存し、またはそれに従属するものとして確定されるのである。気候・食物・地理学上の環境全体が人間・民族・人間社会の物理的・精神的発達を規定している。自然の経過はわれわれの知覚と感情の領域を規定しており、それにわれわれの概念すべてが依拠しているのである。われわれの行為が自然の経過と関係することによって、われわれは行為するときも、このために自然の諸関係のなかにある可能性に制約されている。このように自然の経過全体の連鎖にしたがい、自然の経

過に即して現れる精神的生は、つねにいたるところで何らかの仕方で物理的なものに依存しているのである。次のことはピュフォン、カント、A・フォン・フンボルト、リッター、リービヒその他の人々の功績であった。すなわち彼らは宇宙的・地理学的・物質循環関係等での、精神的生のさまざまな形式にとつての条件を示してみせたのである。

したがって歴史的・組織的に、自然科学が精神科学の前提であり基盤である。そしてさらにそれ以上でもある。個々の精神科学はすべてそれ自体、この心理・物理的連関をたんに土台としているだけではなく、この連関は精神科学自体のなかに入りこんでいるのである。音韻変化の学説は言語学の重要な構成要素であるが、それは発声器官の生理学的条件を研究することに還元されねばならない。しかし宗教の至上の法悦でさえ、自然があたえる印象、気候状況、栄養・食事・睡眠などを断念することと関係している。このように物理的事実は、あらゆる精神科学において精神的事実と結びついている。精神的なことは物理的事実につけ加わるのである。精神的なことは感覚対象に即して現れる。そして共存と連続の規則性によって、精神的システムを物理的事実に依存させる連関のなかで、それぞれの精神科学の構成が成立する(詳細は『精神科学序説』^{14ff})。すでにこのことによって、必然性と法則によって精神科学に占める場所が確保されたのである。

さて精神的なものと結びついている価値付与に、自然の事実が精神科学のいたるところに、環境・条件・手段として入りこんでいる。精神的な内容はそれらのなかにある。なぜなら精神的な内容はその由来によれば同質のものであり、いわば同一平面上にあって、いたるところで比較と結合が可能だからである。精神的な内容は内的経験と、超越論的方法に補完されて理解されるものであり、したがってそれはいたるところで連関している。精神的な内容はわれわれの心的生の構造をいたるところで含んでおり、ゆ

えにそれは価値ある連関なのである。そして心的生の構造のなかで規定された目的設定によれば、こうした精神的な連関はたんなる認識の対象であるばかりでなく、価値付与のような実践的な目的設定でもあるのである。こうして全体から、個々の精神科学がその対象としている精神的な事実の連関のそれぞれのシステムが、理論的目標ならびに実践的目標のなかで分離されるのである。個々の精神科学は精神的な連関のシステムとして、互いに境界づけられる。究極にはこのシステムは精神的世界に属しており、そこで最高の関係にしたがって分岐されるのである。

したがって自然科学と精神科学の区別は、内容の違いによって規定されるのであり、認識方法の違いによって規定されるのではない。そしてこの最上位の区分と一致しながら、両領域での区分をさらに規定していくのは、そうした内容の違いなのである。同一の対象がどのようにして、さまざまな内容のシステムを自己のなかを含むのか正しく理解されるものと仮定してみよう。そうすればたしかに同一の自然の物体が、物理的に見るならば、感覚的事実の連関のさまざまなシステム これらつまり数学・物理学・化学によって表現される を含むであろう。たしかにラテン語もしくはドイツ語の文法のシステムのなかで結びついている同一の事実はまた、ただ関係を変化させて、ふたたび一般言語学のなかで現れてくる。一般心理学・精神物理学・社会心理学・比較心理学は相互に広大な事実の領域を共有しており、この領域はこれらさまざまな学問において、ただ関係を変化させて、他の事実と結びつくのである。たしかに科学の進歩はつねに、分離された諸科学において連関のシステムが自立することと結びついている。こうして天体物理学は最近、天文学の他の分野から分離した。こうした意味で、個々の精神科学が分離することによって分岐される精神科学の全体は、精神的な連関のシステムに応じた区分なのである。ゆえに区分原理の不完全な変化は、なるほど並列に配列され

た分岐にたいしてでなく、従属関係として生じるのである。人は自然の事実と精神の事実の内容の違いを、認識様式あるいは方法の違いによって置きかえようとした。たしかにそうした置きかえは論理的な欠陥ではないが、それは区分の見通しを悪くしてしまうのである。

3

さて諸科学を区分するこの最上位の内容の違いは、認識論的な違い、つまりこれら二つの大きなシステムの内容のあたえられかたの違いと関連していることがさらに示された。しかしこの違いは上述の説明のように、いかなる認識論的な疑念にも屈しない。外的知覚は物的対象を提示するが、内的知覚は、しかもこれだけが超越論的方法で補完されて、直接経験のなかで精神的事実を提供する。そのとき内的知覚は間接的に、つまり外的知覚の媒介によって精神的生のイメージを可能にするが、それは内的知覚にあたえられるリアリティーを補完することによって可能にするのである。すなわち精神的なものについての知は、直接であれ間接であれ、いたるところで内的経験に基礎づけられている。こうして経験に示される、この物的事実と精神的事実の違いを評価するには、以下のことは当然まったくどちらでもよいことである。すなわちこれら二つのシステムの内容が、同一の対象つまり人間に見いだされること、ならびに数学と化学を区別するには、これら二つの学問のなかで展開されたシステムの内容が、同一の自然の物体に含まれているといったことは、まったくどうでもよいことである。人間は、自然の物体が数学的・物理学的・化学的学問の分離によって引き裂かれているほど、これら二つのシステムの内容の分離した展開によっては引き裂かれてはいない。また以下のような批判的な疑念は、まったく経験科学の領域外にあって認識論に属するか、もしくは認識論の愛好者のための形而上学に属するのである。つまり物的なものと精神的なものとの内容の差異は、たとえばたんに認識様式の違いに基づいているのではないが、したがってまったく主観的と見なすべきで

はないが、といった疑念である。感覚の構成要素すべてが意識化され、感覚機能に依存しながら、感覚とともに消滅していくような単純でもうそれ以上分解できない経験から、物理学・感覚生理学・感覚心理学・宇宙研究等を構成しているような特殊で合成された経験にいたるまで、そして究極にはあらゆる経験をとおして、はじめは内的経験のうちにあった精神的事実の範囲が、意識連関の全体へと拡張されることになる。こうしてはじめて、精神的な状態と出来事の連関について、より完全に知ることができるのである。そして分析と理論的考察によってはじめてこのような経験に導かれるのであれば、このことはまた多くの自然科学の経験の場合と何ら変わりが無い。こうして意識の連関に組みこまれる同一の感覚の構成要素は、同時にまた外的対象あるいは感覚的对象に、したがって自然のなかに含まれる、ということも正しい。しかしこのことは矛盾しているわけではなく、ただある問題を含んでいるのである。現象としての自然という概念によるその問題の解決は、認識論に属している。歴史家はそのとき、彼の〔記述する〕歴史上の人物たちの身体と環境がその人物たちの完全な意識連関と同様に、存在しているものと取り決めている。生物学者と人類学者は、安んじてこうした自分たち前提に立って研究している。あらゆる経験科学は、感覚対象についての経験に基づいたシェーマを、また感覚対象に現れる精神的出来事を、そしてそれぞれの人間の身体の意識連関を確信しながら活動しているのである。

4

自然認識とは区別される、精神科学全体の連関にたいする最後の疑念を、まだ検討しなくてはならない。すなわちそれは心理学の方法は、まったくもって自然科学の方法である！ということである。もしこのことがまた正しければ、自然科学と精神科学の区分にたいする論拠は見あたらないことになる。誰しも、天文学と生物学をその分岐として含んでいる自然科学の区分を拒否したりはしない。天文学は理論のほか

に、たとえば月面図のように特殊なものを記述し、そして生物学は動物の諸機能についての一般学説に、動物の種の記述と区分を結びつけているのであるが、異なる方法を持つ学問を統一することは、さしつかえないのであるが、それに反して次のことはきわめて紛らわしい。すなわち最上位の区分において、二つの大きなシステムの内容の一方、つまり外的で空間的な対象のシステムあるいは心的な出来事のシステムの一方に属するものを引き裂くこと。そして基礎科学である心理学を、いたるところでそれとの生き生きとした関係を要するものから分離してしまうことである。しかしこの論証の前提は正しくないのである。心理学の方法は、断じて「初めから終わりまで」自然科学の方法ではないのである。またそんなはずがあるのか。いたるところで、内容によってこそ認識様式は規定されるからである。ヴァインデルバント自身、自然科学の思考の目標を法則のなかに認め、自然科学の思考から分離されるべき歴史研究の目標を形態のうちに認めた。なぜなら個人的に形成された心的生の歴史意識は、自立的な価値をえるからである。ところでまさに個人の評価、特殊なものの記述、類似したものの比較、最後に特殊性・ニュアンス・類似性を対象とする因果考察は、なるほど真の歴史から切りはなせないが、見かけ上は歴史を比較心理学と共有している。さらに心理学の方法と他の精神科学の手続きとの類似性の他の特徴、ならびに自然科学の手続きとの違いの要因については、後ほど取りあげよう。

5

さてヴァインデルバントは、内容の違いによる精神科学と自然科学の区分を「認識目標の形式上の性格」に基づけられた別の区分によって置きかえようとした。「自然科学は普遍的な法則を追求し、精神科学は特殊で歴史的な事実を追求する。」自然科学の思考は一般法則的であるが、精神科学の思考は特殊個別的である。自然科学と心理学は学問のひとつの最上位の部門をなし、その他の精神科学は他の部門をなすこと

になる。こうして変化した意味で、人は今や自然科学の原理と歴史学の原理との区別を、さらに利用することができるのである。

自然科学の思考と歴史の思考の違いということから、ヴァインデルバントは論を起しているのであるが、私はこの違いを『精神科学序説』のなかで強調し、詳細に記述しておいた。私はヴァインデルバントの文章のすばらしい論述にまったく賛同している。にもかかわらず、彼がここで引きだした結論を私は引きだしえなかったし、今もまたそうできないでいる。それは以下のように考えるからである。ヴァインデルバントはかつて次のように表明した。すなわち自然研究(もちろん心理学を含む)では「思考は特殊なものを検証することによって、普遍的な関係を把握しようとするが、歴史では思考は特殊なものが愛情に満ちて刻印されるときに確定される。」これはきわめて正しい。しかしこれもやはり真理の一面にすぎないのである。なぜなら、こうして定義され他の箇所でも同じように表現される歴史的な学問と自然科学の特徴にしたがえば、経済生活の法則を捜しだす経済学も心理学とまったく同様に、自然科学のうちに数えられるからである。すでにこのことによって自然科学と心理学をひとつの部門として、他のすべての精神科学を別の部門として立てるような区分は解消されてしまうのである。それでは言語学がたとえば音韻変化上の類似の法則の働きを究明し、あるいは美学が想像力の法則的な働きを、あたえられた自然形式の基盤の上で探究しようとするとき、事態はどうであろうか。同型性・法則的な関係こそが、これら組織的な精神科学を発展させるのであるが、このことは今日までまだ、人が望んでいるほどの規模では成功していない。そして法則的な関係こそ、最終的に他の組織的な精神科学の一般的部分すべてが見いだそうとしているものである。特殊なものを一般的なものに従属させることが、ここで支配的である。それゆえ認識の自然科学的な分枝に、組織的な精神科学の一般的な命題すべては割りあてられねばならない。これにたいして、

その前提によると次のような命題、つまり個々のものを記述し、または制約された歴史学の領域、たとえばインド・ゲルマン語あるいは自然経済の領域で共通なものを把握しようとする命題は、歴史学の分枝のなかに組みこまれる。かくして組織的な精神科学は引き裂かれる。

もしこのことが何らかの理由で退けられるのであれば、まず歴史記述がそれだけのために、まったく独自に別の部門を形成しなくてはならないであろう。つまり学問の一部門が、またそれで別の部門をなす歴史学の学科をのぞいたすべての学問から形成されることになる。これら二つのとも不可能な学問の最上位の区分のあいだにだけ選択は残されている。その場合、歴史学たとえばポリビウス、マキャベリ、モンテスキュー、トクヴィル、テーヌもしくはわれわれにあってはニッチュが代表しているような歴史学は、外的状況と歴史上の諸力が歴史的な個々の現象に働きかけるときの同型性を捜す。それは歴史科学自体の内部では、同型的なものを認識することと個々のものを記述することを抽象的に分離することに抵抗する機関なのである。

つまりこうである。まさに一般的なものと個性化との結びつきのうちに、組織的な精神科学のもっとも固有な性質がある。すなわち精神科学は、個性化・段階・人間の歴史的生の類似性と類型を規定する因果関係を追究するのである。たとえば道徳上の理想や詩作技法の違いの根底にあるような因果関係は、道徳的な生や文学について確定されるような一般的真理と関係づけられねばならない。この連関を引き裂くのなら、精神科学のそれぞれの分枝、それが道徳的生であれ、詩文であれ、また他の何であれ、真ん中でその分枝の認識のシステムを寸断することになる。それに反してあらゆる精神科学を通じて、基盤としての同型性とそれに基づいて成長する個性化との結びつきを、したがって一般理論と比較考察との結びつきを追究するのであれば、ただちに正しい見解が生じてこよう。心理学の内部でもこうした結びつきを引きだす

ことが、まさしく目下の論文の目標なのである。

こうして内容の原則にしたがった分離が主張されよう。それによれば最初に精神科学と自然科学が分離し、それからこれら二つの知の領域に、より狭い内容のシステムが段階的に従属するのである。真なるものを認識しようとするなら、内容の性質をとおして結びついているものの関連を捜してみなくてはならない。それゆえ内容の同種性が成立しているグループを引き裂いてはならない。区分は、同種性ゆえにできうるかぎり多くの、できうるかぎり包括的な言明がその内部で可能となるような領域を作りださねばならない。学問の内容上の区分は、このことに関心を寄せている。というのはこの区分は、真理が増大するのを促すからである。方法の点では自然認識と類似している精神科学のこの部分を、自然科学に包含することがどうしてこの目標に寄与できるのか、私にはわからない。それにたいしては次のような欠陥、すなわち歴史を組織的な精神科学から引きはなしてしまうこと、もしくは精神科学の一般的な部分を、個々のものとその比較にさしむけられている部分から引きはなしてしまう結果生じる欠陥が明るみになる。もっぱらその限りではそのような配列は、自然な内的関係を乱してしまうのである。

第 章（方法）人間本性の同種性と個性化

精神科学と自然科学 ではその内容が違うとともに、その方法もまた違っている。このことはミルの論理学の有名な最後の論文以来、しばしば反駁されてきた。人は主張してきた。自然科学の方法は普遍的である、と。ただしその主張は、こうした普遍性という意味での自然科学の精神の暫定的な優位の表現にすぎないのである。

まずはじめに、自然科学の方法について真実

をはっきりさせてみよう。方法がさまざまな時代に被った変化は、きわめて大きなものであった。静止して、いわば存在として実体化する世界の構想は、形成的な心的諸力　これは万有の形態と運動において顕在化する　が配置されるという想定と結びついて、もっとも偉大なギリシアの精神にも力をおよぼしている。たしかにこうした力はギリシアの精神をわれわれの近代の思考から、今日の自然研究者の方法と現在の心理学者あるいは言語学者の方法のあいだの間隙よりも、はるかに大きく引きはなしている。スコラ的な頭脳と近代の頭脳とのコントラストはさらにずっと大きい。こうしてわれわれは自身をとりわけ近代的と感じている。われわれはこの点で、全員が互いに結びついているのに気がつく。だれもが、現実についての認識は、ただ経験からのみ引きだせることを知っている。だれしもある種の問題に際して、それらの問題に実験的な処理ができないかどうか、という疑問を抱きやすい。だれもがなんらかの因果関係に量的表現をあたえようと、きわめてかすかな可能性さえ追求するのである。そしてだれもが、事実や同型性のなんらかの範囲を、偉大な数学的・機械的基礎概念に幸いにも関係づけることができる。このことをわれわれはガリレイからロベルト・マイヤーとヘルムホルツにいたる自然研究者と自然探究的な哲学者に負っているのである。さてこの科学的な人物という新しい類型、この近代的な種類の認識方法は、まず自然科学のなかで形成されたので、近代的方法の性格は自然科学的と特徴づけられるのである。自然科学の領域での方法の操作による優位さにしたがって、心理学者・言語学者あるいは美学者は、彼の問題と自然科学の問題とが類似していることから、つねに活発な刺激を受けるであろう。彼はしばしば、こう問うてみるだろう。自然研究者の手段や方法は、彼自身の領域に有効に移しかえることができようか、と。そして彼自身の研究にとって、偉大な自然科学者たちの古典を読むことは、決して無益なことではなからう。

ところで、これらの特徴がわれわれの時代の

科学研究者に共通である一方、同時に彼らの経験様式が、彼らが研究している二大領域へ分離しているのが見いだされる。

すでに両領域での研究者の習慣がまったく異なっている。両領域で真の研究者は、観察能力の持続的な訓練、見て・収集し・ふるい分ける技能を必要とする。しかし外的対象を観察する技能は自然研究者に、歴史的な追体験から、または人間や歴史の状況への心情的に深い親しみから生じてくるような精神態度とはまったく異なった精神態度をあたえる。それゆえヤコブ・グリム、ニーブール、ランケの学者としての性格が、リービッヒ、キルヒホフ、ヘルムホルツらの性格となんと違っていたことが！こうしてすでに個人の気質の違いとして認められていたことが、方法の違いとしてもっと徹底したかたちで現れてくるのである。

自然科学の方法と精神科学の方法の違いということは、これまで活発な議論の対象であったし、今もそうである。ただしその際に問題となるのは、どのぐらいの範囲まで精神科学は自然認識の方法に適合しうるのか、そしてどの程度まで精神科学は、その経験様式と対象の基本特性から、自立的にその方法を形成し、さらに形成してゆけるのか、ということである。一方では自然科学の方法による精神科学の克服、他方では精神科学の固有の成果の理解と承認。なるほど精神科学の背後にはすでに、偉大で光輝に満ちた歴史がひかえているが、その前途には世界を形成するための、ますます増大してゆく実践的な意義を担っているのである。まずできるだけ誤解をはっきり排除するために、いくつか自明なことを述べておくのも余計なことではなからう。自明なこととは論理的操作であって、この操作によってあらゆる領域で等しく、事実は互いに関係づけられるのである。こうした事実は物的なものであれ精神的なものであれ、外的経験あるいは内的経験に現れるのであれ、同じ思考行為と論理過程によって相互に結びつけられる。比較すること・したがって区別するこ

と・同じものを見いだすこと・違いの程度を確定すること・結びつけること・分離すること・判断すること・推論すること、これらは自然科学でも精神科学でも事実関係を認識するために一様に働いている。そしてこのように推論する思考のあちこちで、三段論法・類推・帰納法が適用される。また事実を認識しようとする目的から、科学の両部門で、特殊なものを一般的なものに組みこむこと・個々の事実を連関に組みこむこと・多様なものを区分に組みこむこと、これらのことが結果として生じてくる。要するに事実がどのような性質のものであろうと、またどのような種類の知覚から生じてこうようと、事実はこの論理的な操作によって、つねにいたるところで認識目的に役だつ関係にもたらされるのである。

これらの論理的操作によって科学的方法が成立する。そしてそれは論理的操作が、科学の課題を解決するという目的によって構成された全体と結びつけられることによってである。立てられた課題に似かよった問題があれば、その場合方法は類似した問いのグループ全体にたいして、実りあるものであることが判明しよう。しばしば方法はその発案者の精神では、いまだその論理的性格とその影響範囲の意識とは結びついていない。すなわちこうした意識は、後になってはじめてつけ加わるものである。方法という概念がとりわけ自然研究者の用語法のなかで発展していくように、詳細な問いを扱い、それに応じてほとんど構成されていない手続きもまた方法として特徴づけられる。問題を解決するためにいくつかの道がとられる場合、それらの道は互いに異なった方法として見なされる。また発案者の精神の経験様式に共通な特徴が現れる場合としては、科学の歴史は古生物学でのキュヴィエの方法について語り、あるいは歴史学批判ではニープールの方法について語っている。こうしたことから、ふたたびまったく自明なことが生じてくる。つまり自然科学で形成された方法は、精神科学でも適用されるのである。なぜならきわめてよく似た問題が、科学の両部門

に同時に現れるからである。自然認識によって物的なものとして研究される感事実の関係は、精神科学によっては意識過程の連関として考察される。そしてより高次の精神的生の基盤を理解するためには、それらの研究は非常に重要なものとなった。こうして天文学と生理学が形成した実験的方法は、実験心理学の優れた有効さとともに適用され、形成されつづけたのである。そして植物学者と動物学者が発展させた比較方法は、比較手続きを言語学に適用するのにきわめて役だった。このことからさらに自明なこととして、実験的方法は精神科学においてもその持ち場を見いだす、ということが生じてくる。すなわち実験的方法は特別な意義を、これまで心理学と美学において勝ちえてきたのである。

たしかにここに純粹に外的・量的に見れば、科学の両部門の重要な違いがすでに示されている。自然科学において実験的方法は、支配的な意義を有している。そして実験的方法がより広範囲に適用されるにおよんではじめて、自然科学は堅固な基盤をえて、壮大に発展することができた。ところで心理学・美学・一般言語学でも、実験的方法を利用する際の限界はますます彼方へ押しやられた。そしてその成果はつねに人間の感覚知覚の分析に、また意識の狭隘さ・心的過程の速度・記憶と時間感覚の要因などの特定の心的出来事を正確に記述することに制限されてきたのである。しかしこれまでいかなる実験的研究も、内部心理的な領域では法則を認識するにいたらなかった。また美学と言語学の領域で実験は、芸術と言語の感覚的生と関連した側面にとってのみ、利用可能であった。歴史的・社会的出来事はすべて、実験では近づきえないものであるが、それはここでは純粹に科学的な目的のために操作しうる可能性が欠けているからである。同様に精神科学の領域での数学の利用は、副次的なものである。これにたいして精神科学では、自然科学の帰納法・実験・数学的理論の蔭に隠れてしまう記述(物語)・分析・比較方法が優位を占めている。そして精神科学のこれらの方法に、固有の方法がつけ加わる。そ

れは固有の自己を外的なものへ移し入れること、そして理解する過程で、これに自己の変容が結びつくことに基づいている。これは解釈学的方法であり、またそれと結びついた批判的方法である。それは文献学者と歴史家だけに行使されるだけでなく、それなくしてはいかなる精神科学も成り立たないのである。

以上のことによって精神科学と自然科学の違いが、より深く理解できる。個々の論理的操作・経験様式・方法、これらを適用し結びつけるときの量的な違いは、こうした違いを生みださしない。むしろ内的経験の性質から、また外的なものへの固有の自己の移し入れとそれに応じた理解の過程でのこの自己の変形から、さらに精神的事実と精神的連関の特性から、精神科学というこの領域の根本的で共通な特性が生じてくるのである。これらの特性は、精神科学の手續きに決定的な影響をおよぼし、自然科学との根本的な違いを導きだす。

自然認識には、感覚を介して現象として、外的・空間的なものの漠然とした全体のなかで、個々の感覚印象の同時性と連続があたえられる。しかも感覚が分節化されることによって、多様な感覚からなるそれぞれのシステムは、他のシステムとは比較できないのである。ここに感覚のあらゆる作用が含まれている。そしてこうした作用から、ある特定の明瞭な因果連関を確立することが、自然科学の認識の課題なのである。物的なものはすべて、ある大きさを持ち、ある空間を占め、ある時間のなかで伸張しており、測定され、数えられる。こうした物的なものに即して、測定可能な運動が現れてくる。こうして数学的・機械的構成は、法的に規定された運動の一般的連関を自然現象に組み入れる手段となるのである。すでにはじめからこの自然科学の認識では、なるほど感覚の諸々の質は現れているが、理解できるものとはなっていない。たとえ自然科学の認識が循環するものであり、感覚事実がそれを受けいれて自然科学の認識は始まる 感覚の比較生理学において、

自然法則によって理解されるとしても、[感覚事実は] まさに、それがはじめからそうであったもの、つまりあたえられたままの、導出しえない事実でありつづける。いかなる発展史的研究も、どのようにしてある感覚作用が他の感覚作用に移行してゆくのかをおしえてはくれない。なるほど人は皮膚感覚が聴覚や色覚に変容するのを仮定することはできるが、それを表象したりすることはまったくできないのである。

これにたいして精神的事実は実際、体験にあたえられる。つまりみずからの充溢した体験から転位されて、体験がわれわれの外に模写され理解される。すなわち精神科学のきわめて抽象的な命題にいたるまで、思考のなかで表出される事実的なものとは、体験と理解なのである。こうして諸々の現実、精神科学の素材を形成する。そして現実の内面から、すなわちいくつかの器官をとおさずに、また相互に比較されずに、むしろ内面化された過程にあたえられるようにして体験され、他のものに模写されるのである。このような体験と理解のうちに、われわれの心的諸力の総体は働くのであり、ゆえに精神科学のきわめて抽象的な命題にあっても、内的生は充溢して共鳴するのである。そして次のことが今や決定的なこととなる。すなわち内的経験に心的出来事の連関が現れること、そして内的経験の結合によって、この連関は結びつくことである。というのはそれぞれの部分は、他の部分にとって同質なものであるからである。それゆえ他者を理解することも、他者のうちの連関を模写することに基づいており、この連関から個々の表出が説明されるのである。つまり抽象概念が結合される外的自然の連関は、現象の基礎である。これにたいして精神的世界での連関は、体験され、経験され、追理解される。自然の連関は抽象的なものであるが、心的・歴史的連関は生き生きとしており、生命に満ちているのである。

これらのこと全てから、二つの科学の方法の最初の違いが生じる。

外的対象の堅固さ、外的対象の操作とその測定可能性によって、自然研究者は実験と数学を適用することができる。ゆえに観察と実験で見いだされる経験の同型的な構成要素はここで、数学的・機械的な構成手段に組みこまれるのである。こうして宇宙の巨大な質量の運動、それから光と熱、音響、電気等々が、また他方では化学的過程が理解できるようになった。なるほど細胞が登場し、そのなかで有機的生の特性が現れて、これまでこうした[数学的・機械的]構成手段によって把握することに抵抗してきた。またダーウィンによって導入された進化説が画期的に進展して、環境と有機体の内的特性とのあいだの法則的で内的な関係 この内的関係によって、有機体が種を貫いて変異するのが理解できる を指摘してきた。しかしどうしてこの原形と、原形からは区切られて、種にいたるまでさまざまな相違がさらに持続して結びついてきたかについて、進化説は最終的にはいかなる満足な説明原理ももっていないのである。つまり自然科学はそれに内在する構成原理にしたがって、ここではただ因果的な連結部分がまだ欠けているだけであって、それは見いだされねばならない、ということをやむぎなく堅持しているのである。

われわれはこうしたことにたいして、どれほど貧しくまた同時にどれほど豊かなのであろう。同一の方法を適用する競争が、なんと空しいことだろう。精神科学の方法論の力は、まさに構成に対立する手続きに、どれほど基づいていることだろう。科学の両部門は根底では、事実の総体を認識する際の一般規則から生じるものにおいてだけ互いに一致する。そしてここで同型性に基づいて、現実的なものが個性化するのである。それぞれが個性化することは、特殊なものを普遍的なものに組み入れ、個々の事実的なものを連関に組み入れるのを促す。この連関は自然科学では、基礎となる論理的に明晰な構成手段のシステムである。精神科学では連関は、生の状況のもとにある、内的経験にあてえられた心的連関である。自然科学の構成の理想

とは、原因と作用とが等しくあるような原理による理解の仕方である。こうした理解の仕方は量の絶対的な比較可能性に制約されていなくてはならず、その完全な表現は比較することによって理解するということである。それにたいして精神科学の理想とは、人間の歴史的な個性化全体をあらゆる心的生の連関と共通性から理解することである。心的生の内的連関は、思考のなかで経験が結びつくことによって把握され、記述され、分析される。また同型性は構成要素の結びつきと、各人の心的生に現れる個々の連関のなかで確定される。そのとき精神的な歴史世界の特殊なもの・全体の構成・個性化をこの共通性と連関のなかに組み入れるという課題が成立する。なんとここでふたたび自然認識とは異なる精神科学の独自性が現れていることだろう。自然科学は、組み入れるべき現象と構成手段との同種性を抽象化して引きだしながら、その構成手段に従っている。それにたいして精神科学はまず第一に、途方もなく拡大していく歴史的・社会的現実を、つまり外的な現象や作用として、あるいは生のたんなる産物、生の客観的な沈殿物として現われた歴史的・社会的現実を、それを生みだした精神的な生動性に置きもどすことによって組みこむのである。それゆえ自然科学では抽象化されるが、反対に精神科学では一種の転位によって完全な生動性全体へ置きもどされるのである。自然科学では個性化の代わりに仮説的な説明根拠が捜し求められ、精神科学では生動性のうちに原因が経験される。したがって社会的・歴史的現実を具体的に理解することは、やはり個々の組織的な精神科学にとっても、さらに方法によって操作する際の基盤なのである。

さてこのように理解された社会的・歴史的現実もまた分析される。この分析は前に説明しておいたように、まずはじめに経済生活・法・宗教のような、この現実のなかで共働しているさまざまな文化のシステムを抽出すること、ならびにたとえば家族・国家・教会として現れているような組織の形態からそれらを区別すること

によってなされる。そこではじめて心的生の分析は、これらの社会的・歴史的システムの分析の成果と関係を持つことができるのである。ここ〔社会的・歴史的システム〕で生じてきた同型性は、そこ〔心的生〕で見いだされたものに組みこまれるのである。ここで示されている個性化は、さまざまな状況のもと、つまり生動性がそこから生じてくる事態としての物的・精神的環境における心的生動性の構造と認識しあう関係におかれる。個性化しようとする人間に共通な生動性と、歴史化しようとするこの個性化の関係のなかに、精神的世界を認識できる偉大な連関があるのである。ここで橋を架けるには、比較心理学の訓練が必要となる。他方それは支配と依存・共同体・競争・業績の区分などのような、人間の社会的な共同生活から成立する過程の研究を要するのである。

ところで精神科学の(方法の)他の特徴は、さらにその経験範囲の特質によるものである。それぞれ個々の心的生で構造連関は、心を十分に把握しようとする。自立した内的価値の意識は、各個人の自己感情からは切りはなせない。このことから精神科学の重心は、諸々の差異が捨象されて、個々の人間全員が一致する一般的なものの認識から、個性化という重大な問題に移行することになる。ここで精神科学は個人の生の豊かさを捉えようとするのである。人格への愛情に満ちた理解から、また固有の生の力強さに基づいた汲めども尽きない総体の追体験から、偉大な歴史上の創造が生じてくる。伝記においてはもっとも明瞭に、精神科学に固有な、こうした人格の自立的評価が現れてくる。そしてすでに因果認識を含んでいる個別的なものの描写に、相違・ニュアンス・類似性、要するに人間の歴史的現実の個性化を、連関にしたがって把握しようとする課題が結びつく。そうした連関の本質とは動機づけなのである。前に比較心理学が精神科学との連関で占める位置を指摘しておいたが、今ここでそのきわめて重要な意義が見えてくる。それは比較心理学の特別な性格によって、この認識システムの不可欠の連結

部分としてふさわしいものである。

精神科学の経験範囲の特質から、さらにあらたな特徴が生じてくる。心的生の連関を把握することは、その構造からして心的生の自立的な評価と切りはなせないことをわれわれは見てきた。それゆえ事実的なものを見ることは、完全性の表象と結びついている。存在するものは、それが妥当し、そうあるべきものから引きはなしえないことがはっきりする。こうして生の事実、生の規範が結びつくのである。生という現象における本質的なものとは、そこでの生き生きとした価値連関の表現である。この本質的なものは、それ自体が理想の表象や規範となって表現されるが、それらはこの生の表出を内側から規定するものなのである。ここで重大な方法論上の問題が発生してくるが、精神科学の連関はその問題の解明次第である。理論的な命題は、実践的な命題から切りはなされてはならない。真理は理想の表象や規範から分離されてはならない。なぜなら二部門の命題、その一方の命題は存在するものを含み、他方の命題はそれが何であるべきかを告げるのであるが、それらを互いに切りはなしてしまうと、認識からは実り豊かさを奪い、理想や規範からはその連関と根拠づけを奪ってしまうからである。したがって重要なことは、偉大な人間の生の活動の本質から、活動の規範が生じてくるような連関を見いだすことである。ところで事実と規範とは分かちがたく結びついているので、両者の結びつきはあらゆる精神諸科学を貫いている。そうした特徴は心理学では、きわめて身近な対象である普通のを、変則的なものから区別することである。しかしいったん、このことに注意深くなるとただちに、いかにこの区別が心理学の概念形成に意義深く共働しているかに気づくであろう。組織的な精神科学ですべて、しかるべき事実組織の認識には、その事実組織の規範という前提が含まれるように構造化されている。しかもそれはまさに、評価と目的連関がすでに事実組織に含まれているからである。というのはこの事実組織は究極には、いたるところ

で心的生の構造に基礎づけられており、この構造は生の価値を創出しようとする志向をみずから有しているからである。たしかに歴史学でさえつねに、記述と因果認識と判断を結びつけようとする。それもたんにもっぱら道徳的な判断ばかりでなく、あらゆる人間の生の活動の価値規定と規範から生じる判断をである。シュロツサーやゲルヴィーヌスのもっぱら道徳的な判断は、倫理的には尊いのであるが、議論の余地がある。しかし生じたことについての判断は、それ自体としてはその叙述からは切りはなせない。

こうして究明してみても、一般心理学と比較心理学の関係が明らかになる。さまざまな状況にある精神的な生を統一することは、まず理解において生じる。そしてその生動性や価値の発生によって、その特異性ならびに、この特異性に応じた自立的な関心が生じてくる。こうして統一されて形成されたすべての生の形態が、同じく特異な性格を示すことは避けがたいことである。したがってこうした性格は結局、精神的世界全体にふさわしいものである。しかしこの精神的世界には、生の統一以上の別の側面もある。それは同種性と同型性を示すものである。このことはすでに、精神的なものにたいする自然基盤の関係から結果として生じてくるのである。偉大な法則関係が、自然全体を根底から支配している。そして法則関係が精神的世界を規定する環境を形成することによって、この関係は精神世界では作用の同型性として表出されるのである。しかしこれは同時に、精神的なものと同種性と内的な類似性によって規定されている。精神的世界自体では、同種性と内的類似性が成立しており、これらは思考の普遍妥当性・感情の転位性・目的の論理的整合性そして共感として表出されるのである。すでにストア派、ストア派により規定されたローマ法学、そしてこの法学に基礎づけられた17世紀の自然体系は、この人間本性の同種性をあらゆる歴史条件のもとで際立たせたのである。

このように精神的な生の統一から有機組織の形態としての文化の体系まで、いたるところで同型性は個性化と結びついている。それぞれ個々の精神科学において、この結合は表現されている。またこの結合は精神科学にもっとも固有な問題のひとつでもある。それはそれぞれの精神諸科学が形成されるのに、決定的な意義を担うのである。ゆえに精神科学のいたるところで、どの範囲まで同種性・同型性・法則が個々のものを規定するのか、どの地点から実証的なもの・歴史的なもの・特異なものが現れるのか、をめぐって争われている。とりわけ経済学・法学・政治学は、このことを巡って激しい論争に満ちている。またいたるところで内的連関に、そこでは同型的なものが個性化の基礎をなしているのであるが、接近しようとする傾向が存在する。今や比較方法によってこそ、実証的なもの・歴史的なもの・特異なもの、要するに個性化それ自体が学問の対象となるのである。そして個々の歴史上の現象を学問的に規定することは、ただ普遍史的方法によってのみ成しとげられるのである。ひとつの現象は他の現象を照らしだす。すべての現象の全体は、個々の現象を照らしだす。ヴィンケルマン、シラー、そしてロマン主義者たちの意義深い仕事以来、この方法はつねに実り豊かさを獲得してきた。この方法に、とくにアリストテレス学派、ポリビウス、マキャベリ、ヴィーコ以来、偉大な歴史家と政治思想家がしてきたように、普遍化するために自由に類推することによって、厳密に規定された普遍的命題を獲得しようとする比較方法が結びつくのである。比較方法は言語学で形成され、それから神話学に移しかえられた。以上説明してきたことの結果として、それぞれの組織的精神科学は、その発展の途上で比較方法に到達せねばならない、ということになる。心理学は領域全体の基礎科学として比較科学になることによって、われわれの世紀の精神科学のこの傾向を促し、この方向での発展を押し進めることに寄与できるであろう。

第 章 人間の個性化に関する 普遍的視点

さて人間の歴史的な個性化を把握するための、普遍的な視点が与えられた。これを以下でまとめてみよう。私はこの視点をきわめて普遍的な連関において示したのであり、そこで視点は哲学の歴史の内部で通用するものとなった。その際おのずとはっきりするのは、われわれにとって普遍的視点の価値は、ただその経験的・心理学的基礎づけに依存している、ということである。

宇宙についてのわれわれの知識がおよぶかぎりでは、宇宙は同一の物質で構成されていると仮定してもよい。そしてこれは十分に観測できることであるが、引力の法則とあらゆる天体の運動とは一致するのであるから、この同じ法則がまた万有のさらに異なった部分すべてを貫徹していると仮定してもよい。こうして世界全体に、質量とエネルギーの恒常性・物質の同種性・物質の法則的な関係における同型性が成りたつのである。さて物質に即して現れる心理過程もまた、ある一定の範囲でその構成要素の同種性と経過のなかの同型性を示している。その際、そうした抽象概念に人間の所与性　ここから抽象概念が引きだされる　が表現されているかぎり、もちろん表現もつねに含めて考えねばならない。

現実的なものにおいて、はたして知性に第二の根本特性が対立する。これらすべての同型性に基いて、特異なものが際だってくる。特異なものはそれぞれ、他のものとは異なっている。ライプニッツはシャルロッテンブルク宮で、哲学好きであった王妃の女官たちに二枚の同じ葉を捜すよう促した。そうして王妃に彼の「不可識別者同一の原理」(*principium identitatis indiscernibilium*) を直観的にわからせたのである。つまり同等性とは、段階的に異なる現実の事物についてこの表現が用いられる場合には、

それぞれの差異が完全に消失するのに近づくことを言い表わしているにすぎないのである。この原理の最高の適用例とは、人間の生の単一性への適用である。とにかく現実的なものの個性化にとって本質的なことは、ある特定の基本形態が、これをとりあえずここで類型と言っておくが、変容の戯れのなかでつねに反復する、ということである。そうした類型では、いくつかの特徴・部分・機能が規則的に相互に結びついている。これらの特徴は、それらが結びつくことによって類型が形成されるのであるが、ある特徴の存在が他の特徴の存在と結びつき、ある特徴の変化が他の特徴の変化と結びつくような、そうした相互的な関係のなかで相対しあっている。しかも万有における諸特徴のこうした類型的な結合は、一連の上昇してゆく生の形態のなかで増大してゆき、有機的生で、それから心理的生でその頂点に達する。この類型の原理は、個性化を支配する第二の原理と見なしうる。この法則は偉大なキュヴィエをして、動物の身体の化石化した遺骸から、その身体を再構成することを可能にした。そして精神的・歴史的世界では、この同じ法則がFr・A・ヴォルフとニーブールをして彼らの結論を可能にした。人間の歴史的世界にとってのこの法則の基礎づけと評価もまた、当然心理学上の経験のなかだけにだけあるのである。有機的・歴史的世界ではさらに形成物の生の価値のニュアンスが現れるが、これは部分や機能の分節化のニュアンスと関係している。生の価値が一定の方向へむけて増してゆくような系列が成立する。こうして節足動物の頂点を蟻と蜂が形成し、脊椎動物の頂点を人間の有機組織が形成する。しかし最終的には、この生の価値という概念とこれに関連するものは、人間の歴史的世界にだけ本源的にあてられている。個性化の内部で効力を発揮する原理は、発展の原理と特徴づけられよう。しかし諸々の差異や発達段階は、それらが現れる物理的・精神的環境と内的に関係する有機的な精神的・歴史的世界の全体に見いだされる。環境における特定の相違は、個性化での特定の相違に相応する。前者の相違の程度は、後者の相違の

程度に相応する。そのもっとも明快で主要な事例とは、環境に取りまかれた、また別な表現をすればさまざまな物的・精神的な状況のもとにある個々の人物である。こうした関係を叙述したものが、各人の生活史である。また同様に、憲法や国民文学と、自然条件や歴史・社会的要因との関係も分析される。アリストテレスから偉大な分析家トクヴィルとその後継者にいたるまで、憲法と国家の命運の重大な危機は、そのように分析されたのである。テーヌはそのイギリス文学史で、文学的状況とその環境との関係を研究するという古典的な先例を示した。そして彼がその分析、たとえばシェイクスピアと彼を取りまく状況との関係の分析で残した重大な不備は、彼の方法の形成をさらに促すのである。個性化の問題にたいするこの原理の射程、それと同時にこの射程の限界が吟味されるべきならば、個性化と状況のあいだに成立する重大な同型性の関係が理論的に展開されねばならない。

どのようにしてこれらの関係を手短かに言い表わすことができようか。しかし万有を思考する可能性が、普遍的・数学的法則性のなかに、あるいは量的に秩序づけられた法則にしたがう同種な部分の関係のなかにあるとするなら、たしかにずっと以前から芸術的な眼ざしと哲学的な観想には、世界の意味がきわめて深くこの個性化において、つまり個人・種・類・生活形態・類型的形態・類型的関係に沿った特殊化において開かれていたのである。かつてゲーテが述べたように、自然はすべてののねらいを個性に定めているように思われる。どれほどさまざまな国の自然哲学者たちがこの謎を、個性化・実体的形式・形成力・発展・特殊化と統合などの概念でもって解こうとしようと、その際彼らは明らかに、ただ普遍的な概念とそれに属する言葉で、この謎を繰り返しているにすぎないのである。

あらゆる現実的なものの個性化で、これらの特徴が現れる最高の段階は、人間の歴史的生である。この段階でも同種性と同型性が個性化の

基盤をなしており、個性化はここでその頂点に達するのである。個性化にはここでも、自立的な関心がそなわっている。われわれが自然のなかにただ法則的なものを捜し求める一方で、ここでは特殊なものが科学の対象になるのである。熱されて液状になった鉛が冷たい水のなかに滴り落ちて、さまざまな奇妙な形態をとるのを観察するとき、私はこうした形態に、ただ束の間の関心をもつだけである。こうした形態を規定する法則には、もっぱら自然研究者が注意をむけるのである。あるいはアラブ人にとって、生き生きとした関係をもって、彼の馬はすでにひとつの個性として自立的な価値を獲得しており、また狩人にとっては彼の犬がそうなのである。しかし自然科学の観点では、それぞれの動物の個体はただその種との関係で関心を引くだけである。これにたいして近代の伝記はつねに、フリードリッヒ大帝やゲーテのような偉大で特殊な事例を研究しようとする。ここで現れてくるニュアンス・類似性・類型の探究はそれゆえ、最高の関心を引くのである。

さて以上叙述された精神的・歴史的現実の二つの側面に、二種類の科学すなわち一般理論と比較科学が相応しているものと仮定できよう。しかしまさに、ひとつの領域で成立するこれら二種類の認識のあいだの関連こそを、把握しなくてはならない。心的生の生き生きとした作用連関にむけられ、一般理論の中心点をなす思考は、近代の知の理想にしたがえば個性化もまた解明すべきなのである。この課題は、ある領域において共通なものを確定すること、そしてその領域で実現される個性化、この両者をひとつの体系に統合しようとするそれぞれの科学によってこそ解決されるのである。

しかもわれわれの認識はその現在のあり方からすれば、一般的真理について三つの体系を含んでいる。これらの体系は現実的なものの内容の三つの重大な秩序と関係している。それらの秩序は、現実を包摂する因果連関には還元されない。あらゆる現象を一般的真理の総体でもつ

て解明しようとする理想は、到達不可能である。現象の機械論的理論は、細胞が登場してくるときはじめて、その限界に突きあたる。既知の化学的・物理的プロセスから、外的現実の一部を形成するものとして有機的自然という出来事を引きだそうとする試みは、なるほど方法論的に要求されている。しかしこうした試みが十分な成果を挙げていないかぎり、新しい一般の真理は、物質の物理的・化学的特性についての認識につけ加わるものとして、細胞が登場してくる際に導入されねばならない。さて有機的生に内的状態が結びついているのが見いだされ、その内的状態が人間において特別な形態を受けとり、内的経験に基づいてここで人間の歴史的現実として記述される。その場合、この領域を支配している一般の真理を、外的自然での法則的關係に還元しようとする方法論上の要求は成り立たないことになる。自然認識が、あたえられた現象を分割された質量空間での運動に還元すればするほど、自己意識にあたえられた内的で統一的な生動性は、自然認識の現象からますます決定的に分離する。この生動性の活動の共通の特徴が、脳細胞と神経繊維の動きによって、いつ理解されるようになるかは見極められない。だからそうした時がやってくるのを確信している人々も、その時がくるまでのあいだ、人間の歴史的領域にとつての心理学的な真理を見いだそうとする研究様式の価値を承認せねばならないのである。そうした心理学的真理は、共通性ならびに個性化を、人間の歴史的領域で理解するのにふさわしいのである。

個々の精神科学は分析と抽象化の過程によって、個々の目的連関を人間の歴史的現実から際だたせる。精神科学が到達する一般の真理は、まさにこの現実全体に妥当するか、または現実に妥当するような真理として、具体的な諸条件を追加されて呈示されねばならないのである。しかも心理学は個々の精神諸科学にたいして、それらの基礎科学として関係する。記述し・分析し・比較することによって心理学は、人間の歴史的世界の認識をうち開き、基礎づける。心

理学はこの世界で成立している個性化にたいする説明原理を展開するときのみ、その機能を果たすことができるのである。

第 章 個性化問題の方法的取り 扱いにいたる比較精神科学の歩み

比較科学という概念は、一種の言葉の解釈から、そこでは比較の手續きが優勢であるといったことから導きだせない。なぜなら比較すること・区別すること・似たものを見いだすこと・同型性を認識すること、これらは数学者や物理学者の手續きとおなじく、比較解剖学者や言語学者の手續きでも支配的な思考手段だからである。そもそもそれぞれの一般化が、比較による結果なのである。他方で実験の本質をなす状況の変化、たとえば物理学や化学での同型性の確認に役だつような変化は、たしかに比較自然科学ではこれまでほとんど利用されてこなかった。しかし畜産家の意図的な働きかけを、ダーウィンはそれに依拠していたのであるが、自然への意図的な介入という決定的な特徴をもった実験と類似したものであると認識しようとしなければ、たしかにそれは表面的でそれゆえ不毛な考察様式となろう。

そしてこの自然科学の領域における因果的解釈にとって、どれほどの意義を本来の実験がとりわけ明らかに数世代をとおして継続されねばならない遺伝の性質に関する実験がまだもつものなのか、今日誰も判断できないのである。ヴァイスマンの理論的考察以来、とみに激しくなった遺伝についての論争は、ただそうした種類の実験によってのみ決着がつくのである。それゆえ名称が提示していないものを、無理やり手にいれたりしないでおこう。そしてこれまでわれわれが首尾一貫しておこなってきたように、ここでもまた、非常に変わりやすい方法的態度から、もしくは当面の科学において、ある経験様式が他の経験様式とくらべて優勢であるといった不確かな概念から、この（比較科学という）概念を導きだしたりしないで、そも

そも方法を規定しているシステムの内容の性質から、ここでもまた出発することにして。

科学上の手続きがその領域で成立する同型性を捜すとき、これらの同型性は個々の事実で顕在化してくるが、そのとき個々の事実のあいだの違いといったものは度外視されるということをおぼえてきた。このように個々の事実はこの手続きにとって、法則的態度のたんなる事例にすぎなくなるのである。あるいは科学上の手続きは、まさに個人を個人から分離することの差異について考察し、そのニュアンスを確定できる。こうして成立する類似の関係 それによって個人が集団に組みこまれる、そうした変化を理解できるものとする動因的關係、そしてニュアンス・類似・類型・種類の基礎となっている諸關係をその対象とすることができるのである。相違・ニュアンス・類似・類型・配列・説明を対象とするこの二つめの種類の手続きは、科学に比較という性格をあたえる。こうしてあらゆる科学は、包括的な部門と結びつく。そして科学は同型性に基いて、現実に即しながら記述し、地球・植物の包皮・動物界・人間・言語・神話・権利などを比較しながら、個性化のこうした側面をその対象とするのである。比較科学は拡張してゆき、それゆえ個人を差異・ニュアンス・類似に応じて秩序づけ、これらの關係をあるいは説明根拠に還元するまでにいたる。そしてこのことは当該領域でのまったく一般的な關係を、個性化の基盤と「見なす」比較を前提としているのである。

この比較による考察様式は、ギリシア人によってはじめて完成されたものである。彼らはその氣質にしたがって、一般的で法則的な關係を確定するといった領域でよりも、比較考察ということにおいて、より多くのことをなしたのである。なるほど人間に親密な一様性が生じるのは、植物や動物といった一定不変に区切られた種においてであり、また両性の違いにおいてであり、あるいは民族や人種による区別においてである。しかしながらギリシア人にとって

は、類型的な把握、実体形式による説明、記述的・比較的な 自然科学と精神科学 を可能にした諸々の特性が統合され、これらの特性はギリシア人に同時に、幾何学・宇宙誌・記述的天文学を可能にしたのである。彼らは芸術的に見ることおよび形態の考察では、他のあらゆる国民に優っている。そのもっとも偉大な思想家たちは世界全体に、形成力が配列され段階的に推移するのを認めるのであり、これは特殊化の生き生きとした論理過程のなかで、特殊な差異をとおして現実に即した分類をもたらすのである。

こうしたギリシア人の氣質には、説明する手続きを生物学のまだ混乱していた仮説にとりあえずまかせていた科学の状況が対応していた。なるほど当時すでに、現代では相ならんで比較研究の基礎におかれている二つの仮説が展開されていたが、進化の仮説は当時まだ厳密な学問的操作によって手のとどくものではなかった。アナクシマンドロス、エムペドクレス、デモクリトスはすでに植物や動物の最初の登場について、またそれらの組織が目的に適うように徐々に発展したことについて、そしてそれらの解剖学上の構造と諸機能について論じている。彼らはその際に、古代からルクレティウスにいたるまでの進化説がとった形式の進化説に基づいているのである。この進化説は動物界の個性化を、諸条件のきわめて大きな違いから導きだす。その際に一般的な潮説の信奉者たちは、とりわけ動物が陸地へ移動したことを強調した。したがってこの進化説は、ダーウィンとは対照的に最新の理論もあらためて主張しているように、起源にただちにきわめて大きな多様性をわり当てるのである。進化説は組織の合目的性の増大ということ、より能力のあるものの生存と自己増殖ということから導きだす。この進化説はルクレティウスを通じて17・18世紀まで伝えられてきた。それは近代の進化論の形成にとって、これまで認められてきたよりも、はるかに重大な意義をもっていたのである。とりわけラ・メトリーとディドロはこの古代の進化論

によって制約されており、彼らはこの説を17・18世紀の見解と結びつけようと企てた。しかし古代自体においては、この仮説にたいして実際に、科学的操作を適用することはまだできなかった。それゆえ古代世界での比較の手続きは、逆の想定によって導かれていたのである。すなわち永遠なる世界、そこでの恒常的な生の条件、生物の一定不変の属と種。こうした諸前提のもとでアリストテレスとその学派は、比較動物学や比較植物学を生み出した。また彼らの時代に地理学上の地平が拡大したことが、彼らに経験上の素材を提供したのである。理性・現実を形づくり、質料と結びついて、心的な形成力を媒介として実現される一定不変の普遍的な形式という仮説は、質料世界自体の認識がまだ、有機的生へのいかなる説明根拠も呈示していなかった当時において、有機的生をとりあえず理解できるものとした。また有機的生の個性化の原理を比較手続きを適用するための根拠としえたのである。

そしてこの手続きを精神科学へ転用することも、すでにアリストテレスとその学派によって企てられていた。造形力としての心は有機的世界全体に拡がっており、そして知覚・想像力・記憶・快と不快・欲望と恣意的運動は動物界と人間界の全体を包括している。こうした視点からアリストテレスには、比較心理学という概念が生じてくるのである。驚くべき視野の広さでもって、そのような比較心理学が魂についての著作〔『デ・アニマ』〕のなかで構想されている。特に感官による知覚の比較説は、第二巻(C. 6ff)で述べられており、これはのちに感官知覚の比較説の偉大な創始者であり、その学派からヘルムホルツとブリュッケを輩出したヨハネス・ミュラーに強力な影響をあたえた。同様に第三巻冒頭での共通感覚・想像力・想起についての見事な学説は、動物と人間の個々の形態に関してはそこで詳細には反省されなかったが、きわめて普遍的な性格を有している。こうしてアリストテレスはこの比較心理学で、また自然学の著作では、さらに詳細ないくつかの論述をこれにつ

け加えているが、動物界と人間界の内部の心理の活動を、上昇的な系列に組み入れた。そしてその原理とは時間的な順序ではなく価値の関係であって、この関係は追加されていく能力の内的な構造によって実現されるのである。したがって彼の立てた類型は、時間上の発展系列に配列されるものではなく、下部から上部へむかう構成およびこうして規定される価値の増大によって発展の連関を形成するのである。このことは次の理由により留意されねばならない。すなわち17・18世紀には著作者たちはしばしば、有機体の形態が時間的に発展することを受けいていたような感じをおこさせるが、それは実際にはただこうしたアリストテレス流の概念が彼らにあったからである。このアリストテレスの詳論には、もっとも普遍的な感覚能力とは触覚であって、この触覚とともに感情と、食物を求める曖昧な性向がただちにあたえられる、という見事な洞察が存在している。さらにこの比較という同じ原理を、アリストテレスは同時に国家学に適用した。状況の相違、生物とその生物が必要とする諸条件との関係を有機的世界で追究したように、彼はまたそれぞれの政治全体の内部のさまざまな階級の生の条件・機能・権限の連関のなかに、国家の比較解剖学と比較生理学の原理を見いだした。この原理に基づいた比較政治学は、『論理学』以降の彼の作品中もっとも円熟し、今日なおもっとも影響力のある作品である。これにそれからディカイアルコスの歴史・政治学研究が結びつくのである。

近代の学問の性格とは因果認識であり、法則的關係を表現する公式による思考であった。この思考は力学・物理学・化学を生み出した。それは宗教・法律・国家・経済においても、同型的にいたるところで現れる構成要素すなわち法則と規範を明示した。こうしてこの思考は、精神科学の自然のシステム、自然神学、自然法、政治経済学の抽象的システム、そしてパワーと彼の同時代人たちの詩学を立案した。しかし人がこうして歩んでゆくにつれて、これらの学問の地平にふたたび、ギリシア人がその比較科学

で取り扱ってきた同一の問題が浮かびあがってきたのである。

普遍的な啓示、普遍的な自然法、人間のあらゆる有機組織の自然の原則、普遍的な自然道徳、文芸作品の規範が、精神科学の自然のシステムを形成する。16・17世紀の学識ではこのことに、古典の学識のなかで蓄積された素材を後代の認識と比較することをとおして、この自然のシステムを究明する努力が結びつかねばならなかった。とりわけストイックな意向がこのなかでさらに追求された。こうした連関のなかでジャン・バッティスタ・ヴィーコが現れた。彼は1668年にナポリに生まれ、その地でまた生涯を送り、1744年に死んだ。この同じ時代にまた、動物を相互に、そして人間と比較することによって器官の一般解剖学と生理学的解釈に達しようとしていたことは、注目に値しよう。ナポリで教授として1656年まで生きていたマルコ・アウレリオ・セヴェリーノはこうした方向を開いた。その次の世代では、この比較解剖学という概念はトーマス・ウィーリスに見いだされる。彼はとりわけ多くの四足動物・鳥・魚の脳の記述と比較に没頭したが、それを次のように規定している。「さてこうして、さまざまな動物の個々の部分の一致点や相違点、あるいは互いに比較され、また人間と比較される動物の一致点や相違点を詳述しようとするなら、その場合たしかに私はそうした比較解剖学によって、ただそれぞれの器官の諸機能を発見できるだけでなく、動物の心自体の痕跡と表出を、またその影響と秘められた作用の仕方を発見できるのである。」クロード・ペロー、サミュエル・コリンズ、フランシスコ・レーディ、マルセロ・マルビーギ、ジャン・スヴァンメルダム、アントン・フォン・レーウェンフクラは、同様の仕方でも研究した。さてこうして普遍的な比較によって一般的な原則にたどりつこうとする傾向がヴィーコを取りまいており、またこの方法を特別に応用するうちに、とりわけまたベーコンの論文『古代の叢智について』、神話に関するオランダの文献学者の研究、そして当時の法学上の著作、とくにフーゴ・デ・グロティウスが彼に影響をおよぼしたこと

によって、1725年頃に彼の画期的な著作『諸国民の共通の本性についての新しい学の諸原理』が成立したのである。

この著作は精神的世界の形而上学という課題、もしくは人類の形而上学という課題を立てている。すなわちそれは歴史を引きおこした根源の力を把握しようとする。しかしそれは、文献学者と文献学によってになわれた当時の法学者と歴史家の手段と方法によっておこなわれるのである。こうしてこの著作はその題材の拡がりとして、クレメンスとアウグスティヌスによって形成された普遍的で世界史的な視点[のもとでの]題材の学問的な取り扱いによって、古代の比較手続きを踏みこえている。これらすべてによるよりも、原始的な心の状態にある英雄的なもの、その表現様式の詩的・隠喩的なものを理解する能力によるほうがさらに大きい。それは偉大で孤独な心の活力のなかにあるのである。これらの力すべてをもって、ヴィーコは比較の手続きによって、あらゆる国民に共通なものを、また彼らの原初の発展の段階がそれに即して、いたるところで交互に平行して生じてくるような普遍的法則を見いだすことに関心をむけている。神々の時代、英雄の時代、そして人間の時代があらゆる国民において交互に生じてくる。「あらゆる古代の異教民族は、ヘラクレスとともに始まる。」「太古の人々と異教の国家の創設者たちは、圧倒的な感覚の強さと途方もない想像力をそなえていた。」

さて以上のことに、雄々しい習俗と原始の思考の隠喩的な性格についてのヴィーコの深遠な叙述が基づいている。こうして彼ははじめて、ホメロスの時代やローマ時代初期の人間と後世の時代の人間との心理学上の違いを認識した。そしてこのことから比類ない予感力でもってホメロス、ローマの最古の歴史、また宗教・法律・文学の原初の段階についての結論を引きだした。しかしこの比較の手続き全体は、あらゆる国家に共通したものにむかう17世紀の大きな趨勢に呼応しており、国民の発展に共通したもの

だけに差しむけられていた、という点にその限界を有するのである。

差異・程度・類型・類似を研究するのに比較を適用したのは、はじめ18世紀の仕事であった。それはアリストテレスの時代と同様に、当時もまた自然科学から始まった。しかし今度は、より高次の段階でおこったのである。血液循環の機構から、生体の諸機能を機械的・生理学的・化学的に説明できるようになった。こうしていかに有機的生命の多様な形態が配列され、分類され、説明されうるか、という昔から存在しつづけてきた大きな問いへの学問上の解答が可能となったのである。個性化の問題は、すでにインドの僧侶思想家たちを煩わせていたわけであるが、その完全に根源的な深遠さという点では、18世紀以降やっと把握され、学問的に扱えるようになった。自然科学が個性化問題の解決のために発見した概念と方法は、それから人間の歴史的世界での個性化にも適用された。属・種・類型・発展・環境・内的形式・構造 これら諸々の概念は自然科学の思考によって生みだされ、精神科学で利用された。それゆえこれらの概念は、その成立した場所で探索されねばならない。記述・分析・比較・説明といった方法を個性化の問題に適用することは、生物学ではじめてなされたのであり、ゆえにそれらもまずここで探索されねばならない。18世紀に比較自然科学がとてつもない成果に達したことに規定されて、精神科学の比較手続きは成立した。心的差異が感覚器官・脳・神経と筋肉の全組織の差異に依存し、状況・気候・食物に依存していることは、まず最初に自然科学で研究され、その後それらの見解が精神科学に適用されることになった。個性化を規定する要因を厳密に実験し比較する研究は、このときからはじめてこの進路に定められたのである。人間の個性化は、地球と地球上の有機体の発展との連関、そして地球の気候の違いとの連関のなかにおかれた。リンネ、ビュフォン、ドバントン、キュヴィエ、ラマルク、ゲーテ、ヘルダー、フンボルト兄弟、ポップ、グリム、比較神話学者と言語学者は、精神運動の動因的關係によって相

互に結びついている。そして比較心理学の課題はただ、そこで比較心理学が成立しているこうした連関を明瞭に意識することでのみ解決されるのである。

有機的世界とそこでの個性化の探究は、自然科学がその法則に即した歩みのなかでなした最後の一步であった。すなわち動物の生と人間の生の形態と法則の同種性を証明することによって、自然科学は同時に精神科学の境界にまで導かれたのである。自然科学の法則に即したこうした歩みは、たびたび逸脱するよう影響されたにもかかわらず、全体としては諸科学相互の依存性によって規定されてきた。なるほど個々の科学は、それらの基礎となる現実への問いがつねに存在するゆえに、共存しながら発展する。とりわけ精神科学は、それ自身に内在する法則にしたがって、つねに自然科学とならんで発展してきた。しかし個々の科学の草創期は依存関係にあって、この依存関係が科学の年代上の順序に影響をおよぼすのである。しかもそれぞれの段階で、いくつかの科学はそれぞれの程度に、相互に規定されている。これらの科学はそうして合いならんで、そして同時に内的に相互作用を受けながら発展してゆく。こうして近代の数学・力学・天文学は相互の内的関係にしたがいながら、ニュートン、ライプニッツ、ホイヘンスらが万有力学を樹立するまでの17世紀の建設的な精神の時代に発展するのである。物理学では自然に即しながら、まず音響学によって成立した波動の観念に基づいて、ニュートンとホイヘンスによって光学の基礎がおかれた。ニュートン、ランバート、ブラックは熱理論を基礎づけた。デュフォイ、フランクリン、ワトソン、ノレその他の学者は、構成された世界全体を動かす実験で電気の一連の基本特性を発生させた。そしてついには数多くの予備的研究ののちに、ラヴォアジエによって1774年以来、学問としての化学が基礎づけられたのである。

これらは記述的・比較自然科学がそこに基づいて、これから発展してゆけるような基礎であ

った。この基礎において地質学・鉱物学・植物学・動物の身体についての科学が、それらの進歩が同時に、きわめて生き生きと関係しつつ相ついで可能となるような仕方でも相互に規定されるのである。

さてこうして有機的な人間の歴史世界の内部での個性化という大きな謎が、比較方法によって解こうとされる包括的な出来事が成立した。そしてその最後の構成部分が、比較心理学の構想なのである。

生物学は三つの時期に、植物界と動物界での個性化を組織的に秩序づけ、説明しようと試みた。

最初の時期はリンネでもって終わる。地理学上の地平が拡大するとともに、既知の生の形態の数は中世をとおして、それから諸発見の時代からは飛躍的に増大した。二名法の技法によるたしかかな命名、植物の生殖器官の区分原理にしたがって経験的にあたえられた種を規定し、体系へ統合する分類、これらが植物界での個性化を概観するのを可能にした。リンネによる人為的な体系が全ヨーロッパに拡大されて活用されるなかで、ジュシュー（Jussieu、兄）が1759年にトリアノンの王立植物園を自然体系にしたがって分類した。その分類法をのちに彼の甥が一七七四年に公表し、ついに『自然の秩序にしたがって分類された植物の属』を出版したのである（1789）。

二番目の時期はビュフォンとハラーとともに始まり、ライエルとダーウィンの登場でもって終わる。この時期には生物が圧倒的に多様であることへの、自然がわれわれから隠した例証となる内的な連関を見いだすという大問題が、比較解剖学およびそれと結びついた生理学の基盤に基づいて、まず動物の生の領域で解決されはじめた。この時代には形態学的な考察が支配的であり、それは動物の身体の各部分と諸機能を、身体を取りまく環境に対応する働き全体に

結びつける構想から出発している。こうした概念から形態学的考察は、比較しながら類似関係を規定し、まず最初に脊椎動物の類型に達する。その最高の現象と基準となるのが人間である。さてこれらの脊椎動物から無脊椎動物が分離せられ、さらに無脊椎動物はそれらに実現された構想の観点から分析され比較された。このようにしてキュヴィエの脊椎動物・軟体動物・体節動物・放射相称動物という四類型の分類が成立した。しかし次のことによってはじめて、この時期は建設的なものとなるのである。つまり構想内部での類似関係と相違についてのこうした比較探究が、系譜学的な解釈に迫らねばならなかったこと、そしてこの解釈がついには思考の統一傾向にしたがって、生物の原型という概念と、原型の分化による発展ということのなかではじめて完結した、ということである。

ビュフォンは生物の活動のための舞台を創りだした。きわめて大胆な仮説を結びつけながら、彼は惑星の誕生、地球の歴史、地球上での生物の登場、有機分子からの生物の合成を、あたかも彼がこれらすべての観客でもあったかのように叙述している。灼熱した金属球を冷却することによって、彼は地球のゆっくりとした冷却が地表の形成にあたえる影響を説明した。またマルビーギ、レーウエンフック、スヴァンメルダムの顕微鏡による諸発見によって、細胞がそのなかで兆している有機分子という着想に彼は達した。さらに同僚であるドバントンの化石についての研究によって、彼はより古代の動物界のイメージをえた。そして晩年にはその精神に、種が変容する可能性ということがかすかながら浮かびはじめたのである。さてこのような基盤のうえに、彼の動物たちは存立している。共同研究者であるドバントンの解剖学上の調査を介して彼は動物を比較するようになり、はたしてすべての動物がひとつの構想にしたがって創られているのを見いだした。そしてこれら動物をのちにキュヴィエが、脊椎動物としてひとつの部門に統合したのである。動物の構造とその生活条件との関係から、動物の生動性を把握

する彼の美的な天分によって、個々の種類の哺乳動物についての彼の叙述は傑作となっている。芸術的な自然観察や人間観察に多大な影響をおよぼした彼の美的な態度は、キュヴィエとカール・エルンスト・フォン・ベアによって科学的な方法へと高められた。キュヴィエの至上の原則にしたがえば、有機体の各部分は、内にむけても外にむけても一体となるように調和されねばならない。さてこのことから各部分の相関性の法則が生じるのであり、それによれば個々の部分は、他のすべての部分が相応した変化をしなければ決して変化できないのである。ついには彼は性格の従属関係の法則をたてる。それによると動物個体とその種族を維持するという課題にとって、諸器官は異なった重要さを持ち、このことと諸器官の持続性の違いは連関しているのである。これらの原則に導かれて比較をおこなう諸研究によって、はたして彼はその四つの主要形態にいたった。そして相関性の法則を利用して、彼は化石化した動物の遺骸からその全体構造のイメージを引きだせるようになった。彼は今日の動物界以前に、それとは異なった種類の他の動物界が存在していたことを証明できた。キュヴィエがこのために、脊椎動物の遺骸についてあてた証明を、ラマルクがその甲殻類の殻の調査によって補完したのである。これらの直観は天才的な胎生学者であるカール・エルンスト・フォン・ベアによって、胎児の発生史についての彼の研究に基づいて、きわめて深くまで押し進められた。彼は個々の類型の内部での発展段階を区分するために、分化の原則を導入する。すなわちもっとも下等な動物の本体から出てくる諸機能は、この分化によってさまざまな器官へ配分され、これらの器官の内部でも、それからさらに分化した部分へ配分されるのである。

さて因果解釈にむかう知性の一貫性にゆだねるようにして、ラマルクの進化説が成立した。身体の形態はこの説によれば、動物の生活様式を規定するものではなく、生活様式こそが時とともに身体の形態を変化させてきたのである。

環境のさまざまな相違は動物の身体に、変化しつづけ子孫を残してゆく能力をとおして、動物界のあらゆる相違をもたらす。このように彼の説が形態学自体に内在する誘因によって導かれるならば、ここで同時に、デモクリトスからの伝統のなかで考えつづけてきたフランスの唯物論者たちの着想が介入してくるのである。

この唯物論者たちはルクレティウスでは、有機体の自然史が段階的に連続しながら上昇してゆき、人間がこうした連続した段階に組み入れられているのを見いだした。若々しい活力にあふれた大地からは多種多様な植物が芽吹き、それから動物たちが引きつづいて現れ、その四肢が異なった構造とさまざまに結合した形態が登場してくる。これらの動物形態のうち、自己自身を維持できる、つまりみずからを養い、危険から身を守り、繁殖してゆける動物形態だけが存続できるのである。太古の人間は動物に、いまだきわめて似かよっていた。また人間は動物と闘いながら森のなかに住んでいた。そして徐々に人間の文明が成立してゆく。生物が自然に誕生してゆくこうしたイメージは、ルクレティウスをとおして18世紀にあまねくゆきわたった。唯物論者たちはこのイメージを、あたらしい自然科学の手段で形成したのである。このあたらしい唯物論の創始者はラ・メトリーである。彼はエピクロスの体系を記述した。つまり自然を認識するための真の出発点をラ・メトリーはエピクロスのなかに見いだしたのである。それと同時に彼の先生であり、スピノザの信奉者でもあったブルハーフェが彼に影響をおよぼす。またデカルトによる動物の身体の機械論的な理解によっても、彼は規定されている。さてその著作『植えるひと』(1748)のなかで彼は、自然の同型性の原則から、あらゆる生物を結びつけている類似、たとえば葉による呼吸と肺による呼吸との類似、植物の授精と動物の授精との類似を追求している。欠けるところのない階段を自然は、植物から動物をとおって人間へと昇りつめてゆく。さらにデイドローは先へ進む。すでに1749年の盲人についての書簡のなかで、

彼はエピクロスとルクレティウスという基盤にうえに立っている。諸々の世界は無限の空間のなかで誕生し、ふたたび滅び去ってゆく。芽生えてくる有機体のうごめく大群から、生存競争の淘汰によってある特定の動物の種が保存される。それから自然を解釈した著作(1754)のなかで、彼はこの観念をピュフォンから受けた感銘とともに、あらゆる動物の原型説に結びつけたのである。最終的には彼にとって感覚とは、物質一般の特性である。不活発な感受性が活発な感受性につねに移行し、植物の領域から動物の領域へも、すでにピュフォンが強調していたように、いたるところで移行が生じているのである。こうしてある最初の生物を、その他すべての生物の原型とする仮説は、ほとんど避けがたいものとなる。個々の生物が誕生し、成長し、絶滅してゆくように、種全体に関しても事情はなんら変わるところがない。それからロビネはライブニッツによって規定されながら、その1761年の自然についての著作で、そしてより明確には『存在形式の自然の位階に関する哲学的概観』(1768)のなかで、生命をもたない自然の物体も含めることによって、これらの理念にさらに幻想的な形式をあたえた。自然のなかでは、気づきにくい等差や微小なニュアンスのものであらゆるものが相互に結びついており、ひとつの原型は自然のなかで無限に変容する。それぞれの変容は自然の習作のようなものであって、長く連続するそうした試みを必要としたのである。「下等な動物から人間にいたるまで驚くほど変容しつづけるなかで自然はその作業を進めており、その仕事に栄冠を授けるこのすばらしい存在(人間)を手探りしているのに私は気づいた。」

このような文章を読むと、人はゲーテとヘルダーのことを想いおこすであろう。すなわち個性化全体の主体としての自然。そこで働く技巧は自然を、無意識に創造する芸術家に比せられるものとする。生物の個性化全体は原型から、その内部にある可変性にしたがって導きだせる。人間とはただこの類型が現実化した最高の

段階にすぎないのである。有機的な人間世界での個性化をこのように美的に把握することはシャフツベリー、ピュフォン、ディドロ、ロビネに含まれており、それはゲーテとヘルダーによって受容された。これらの契機を考慮すると、文学史を煩わしてきた問い、つまりゲーテとヘルダーが彼らの共通の財産として扱ってきた自然科学にたいするその関心とは何であったのかという問いは、ちがった光のもとで見えてこよう。両者ともはじめは、前述の自然哲学の学問的運動の影響のもとにあった。この運動から彼らは、自然科学を共通の財産として受けとった。地球はさまざまな時期に発展した。ある特定の時点で生物の段階がはじまるが、生物は地球の内的な形成力から誕生するのである。植物の包皮が形成されたのちには、動物界が現れる。動物界での類似点は、動物の統一された構想に還元されるが、その構想が変異するのは生活条件しだいである。こうした変異は段階的に秩序づけられ、そこで人間は最高の脊椎動物として頂点をなす。ゆえに人間は動物たちの兄弟なのである。さてこうした原型・変異・ニュアンスについての説が、ルクレティウスやディドロが考えたような時間上の連続を意味するのか、あるいはそれはたんに類型と変異のあいだの理念上の関係を表すにすぎないのか、という問いが生じるとすれば、この問いを解決するための諸前提もまた、私が別にこれから示すように、歴史上の連関のなかにあるのである。

個性化という謎を解決するための、生物の比較研究の第三の時期は、われわれの世紀の三分の二が過ぎた時点でようやくはじまる。それはライルの地質学との出会いによって規定されるのであり、この地質学はキュヴィエの破滅説を打ちたおし、広範囲におよぶ方法を提示した。すなわち今日われわれの眼前で生じている地表のもろもろの変化は、地表のかつての歴史を説明するための根拠を十分に含んでいること。そしてゆっくりとした気づきにくい変動ということで地球の現在の状態を解明するには、途方もなく長い時間がかかる、ということである。つ

まりこのことによって、植物と動物の種が繰り返しあらたに創造されるという仮説からは、それは化石化した遺骸から結論づけられたのであるが、その地盤が完全に奪われたのである。まさにこうした地殻の連続した変遷に、地殻を覆う生物の連続した発展が対応する、という思想はいまや避けがたいものとなった。そこへダーウィンが登場してきた。四つの契機が彼にとりわけ作用した。ライルのライフワークのあとでは、植物種と動物種のあらたな創造ということは、時代錯誤となってしまった。旅の途上でダーウィンは、場所を移動してゆくにつれて、種がある種から他の種へと徐々に移行していくのに気がついた。現在地表または地中で活動している力は、その種類と規模の点では、きわめて遠く隔たった時代に地質学上の変動を引きおこした力と同一のものである、というライルの法則にしたがって彼は、家畜の飼育と園芸植物の栽培で今日もなお作用している改良力を研究しはじめた。そして彼は、園芸家と飼育家がつねにもくろんでいる人為的な種の淘汰のなかに、有用な種属を産みだすのを成功させる鍵があるのを見いだしたのである。こうして自然淘汰の有効範囲を探究することが重要となった。さてマルサスの『人口論』によって、彼はついに生存競争という概念を手にした。すなわち食物と生存のための有利さ、とりわけ雌をもとめる競争において、よりよく装備されたものが勝利し、反復される淘汰〔選抜〕のなかで、もろもろの長所が徐々に累積されていくのである。このことでもってのはじめて、生物の個性化にたいする自然の説明根拠が見いだされたのである。われわれはその説明根拠の有効範囲をめぐる論争の真ただなかにいる。シュライデンとシュバンの細胞説で、ペーアの発達史的な研究で、ネーゲーリ、ヒス、ヘッケル、ヴァイスマンその他の調査において、こうした個性化の自然の原因を規定する要因がさらに生じてきた。すべてはいまだ進行中である。

近代の比較自然科学のこれら三つの時期に、人間と社会に比較方法が適用された段階が対応

している。

したがって次のことを認識することが重要である。すなわち自然科学の領域から精神科学の領域への移行が、そこでもろもろの命題に堅固な基盤があたえられた、どのようにしておこなわれたのか、どの概念がこの移行にさいして、実り豊かなものであると判明したのか、最後にはどのくらい、この移行が不都合な結果も伴ってきたのか、そしてどのくらい心的なものの特質から生じてくる他の考察様式によって補完されねばならないか、ということである。〔……………ここで論文は中断している。〕